



(公財)印旛郡市文化財センター

40th
記念企画展

印旛の 珍品展

～発掘されたあれやこれ～



公益財団法人
印旛郡市文化財センター

千葉県佐倉市春路1-1-4 TEL 043-484-0126 <http://www.inba.or.jp/>



開催に当たって

当センター設立40周年記念企画展「印旛の珍品展～発掘されたあれやこれ～」の開催に伴い、展示の内容に沿ったリーフレットを作成いたしました。今回の展示では、印旛地域の遺跡から出土した個性豊かで珍しい品々を展示しています。11市町52遺跡から厳選した計159点の出土品を揃え、旧石器時代から近世までの時代ごとに大別し、展示を行っています。大小さまざまな珍品の数々をお近くでご覧いただき、その用途や製作された背景などについて想像を膨らませ、当時の人々の営みや環境に思いを馳せていただければと思います。

本展示が多くの方々にとって、印旛地域の歴史に関心を深めていただくと同時に、文化財保護への御理解に寄与できますことを、心から願っております。

また、当センターでは今後も継続的に様々な時代の遺跡を調査してまいります。それらの成果につきましては、ホームページ、広報誌、YouTube等で随時お知らせします。ぜひ、ご覧ください。

最後に、遺物・写真資料の借用に御協力賜りました各市町、御後援いただきました印旛地区文化財行政担当者連絡協議会、ならびに多くの関係諸氏・諸機関に、心より御礼申し上げます。

もくじ

旧石器時代.....	4～7
縄文時代.....	8～11
弥生時代.....	12～15
古墳時代.....	16～19
奈良・平安時代.....	20～22
中世.....	23～24
近世.....	25～28
展示目録.....	29～31

旧石器時代とは？

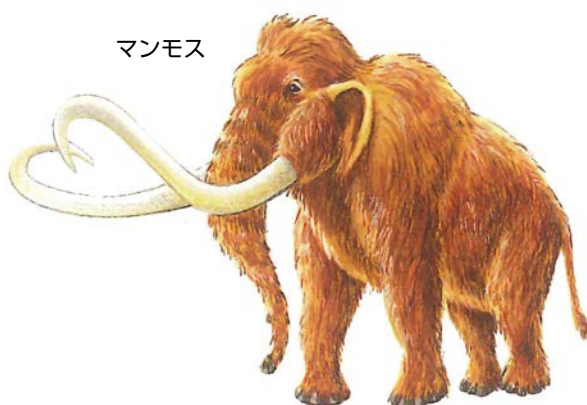
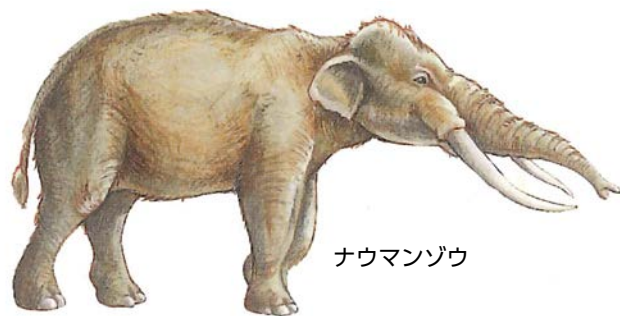
今から約3万8千年前から1万6千年前の約2万2千年間の時代です。人々はまだ土器をもっていない時代であり、石を打ち欠いて作られた道具(石器)や動物の角や、骨を用いた道具(骨角器^{こっかくき})を使用して、狩猟や採取の生活を送っていました。定住せず、簡易的なテントを建てて、移動しながら生活を送っていたとされています。当時の気候は氷河期という寒冷な気候であり、年間の平均気温が今より7～8度低く、また火山活動が活発でかなりの頻度で火山灰が降り注ぐ非常に厳しい環境での暮らしでした。このような気候であったため、現代の植物相とは異なっており、針葉樹(モミやカラマツなど)を中心とした森林が広がっていたと考えられ、現代でいえば標高約1500mの風景が広がっていたと推察されています。

旧石器時代の動物相とは？

旧石器時代の日本列島は、今よりも海水面が低く、また北端は大陸と繋がっていました。約30万年前には中国北部からナウマンゾウやオオツノジカ^{ほにゅうい}といった大型哺乳類が移り住み、日本全土へ広がっていきました。約7万年前になると同じく北方からマンモスやヘラジカが移り住むようになりますが、寒冷地に適した動物であった為、そのほとんどが南下しなかったようです。



旧石器時代における化石動物出土地点



コラム・発見！印旛沼のナウマンゾウ

ココに注目!?

1966(昭和41)年、印西市内の印旛沼^{そうすいろ}捷水路工事の際、重機による掘削作業中にナウマンゾウの全身骨格化石が発見されました。当時、全身骨格が発掘される例は極めて稀で、日本で初めて全身が復元されたナウマンゾウとなりました。発見された地層から約30～20万年前に生息していたものと考えられ、臼歯や牙の形から推定年齢10～12歳の若いナウマンゾウであることがわかりました。



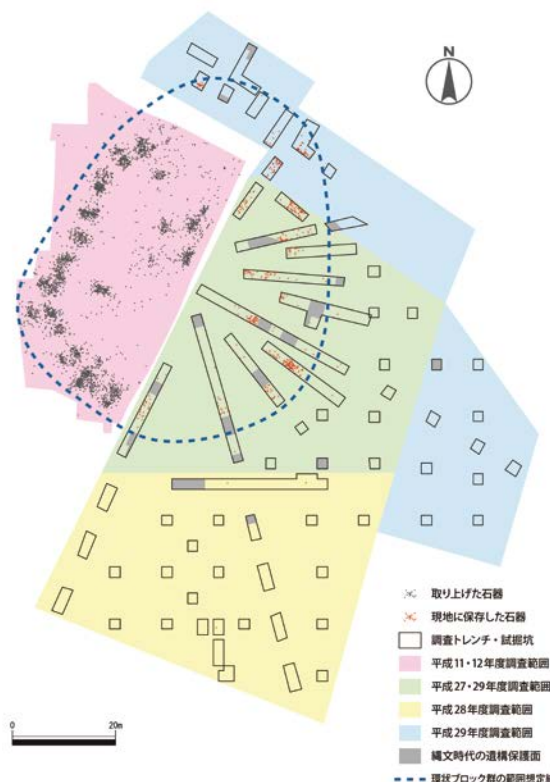
ナウマンゾウの全身骨格レプリカ
※千葉県立房総のむら所蔵



当時の発掘調査風景
※印西市教育委員会所蔵

日本の旧石器文化3大特徴

旧石器時代の発掘調査をしていると、「環状ブロック群」や「^{おとしあな}陥穴」、「^{じんぶ ませいせきふ}刃部磨製石斧」といった特徴的な遺構や遺物と巡り合うことができます。中でも環状ブロック群は旧石器時代の初頭(約3万8千年前～3万年前)、千葉県北部から埼玉県の一部地域を中心に石器が集中する所(ブロック)がドーナツ状に巡る遺構であり、世界史的に見ても類を見ない日本独特の旧石器文化の1つです。^{いんばぐんし すいまち}印旛郡酒々井町にある^{すみふるさわいせき}墨古沢遺跡は現存する環状ブロック群として、2019(令和元)年に国指定史跡に指定されました。環状ブロック群を構成している石器は接合することが多いです。このことから、石器製作に関する技術や石材の産地、狩猟対象に関する情報交換などを行うための場として、一時的に集団同士が集まり、集団間のつながりを確認するために形成されたものと推測されます。



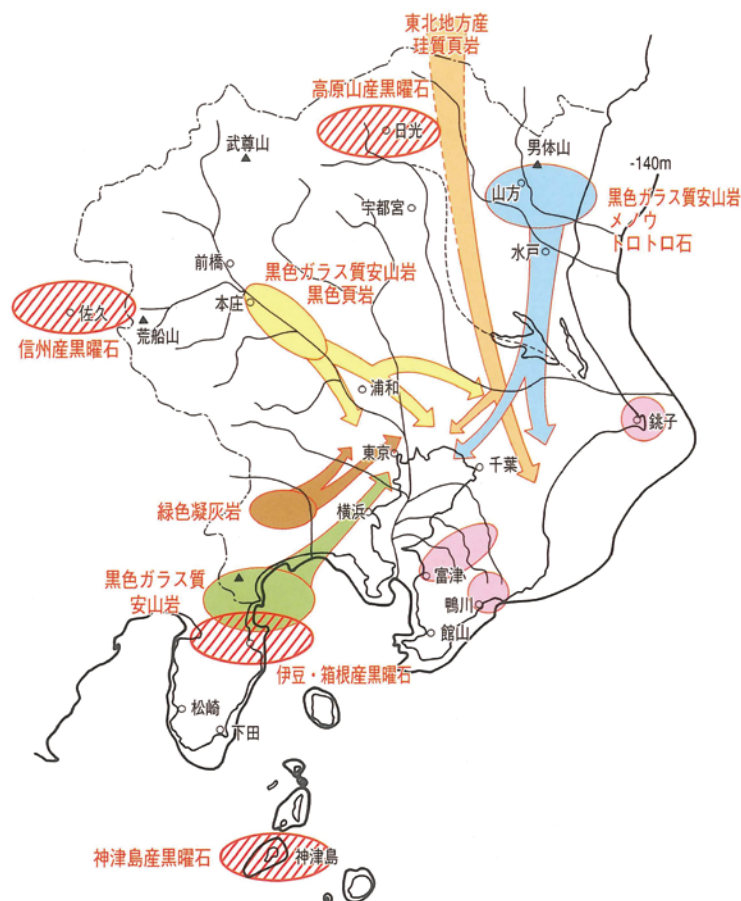
↑ 墨古沢遺跡石器分布図

← 平成27年度墨古沢遺跡発掘調査風景

※酒々井町教育委員会所蔵

石器が作られる石材はどこから？

石器に使用する石は、石なら何でも良いというわけではなく、黒曜石や頁岩、チャートなど加工しやすくまた割れ口が鋭くなる石材が使用されます。千葉県は「石なし県」と呼ばれたほどで、石器を作成するのに適した石材の産地が知られていないところとして、石材のほとんどが外部からの搬入に頼っていたものと考えられてきました。しかし近年、新たな石材産地の発見や県内で産出される石材を多く使用した石器群の検出により、その状況が変わりつつあります。中でも銚子産のチャートや古銅輝安山岩、礫層中に確認される黒色ガラス質安山岩や玉髄、黒色頁岩、嶺岡山地周辺にみられる珪質頁岩などが注目されています。



メノウ



トロトロ石

黒色ガラス質
安山岩

珪質頁岩



チャート



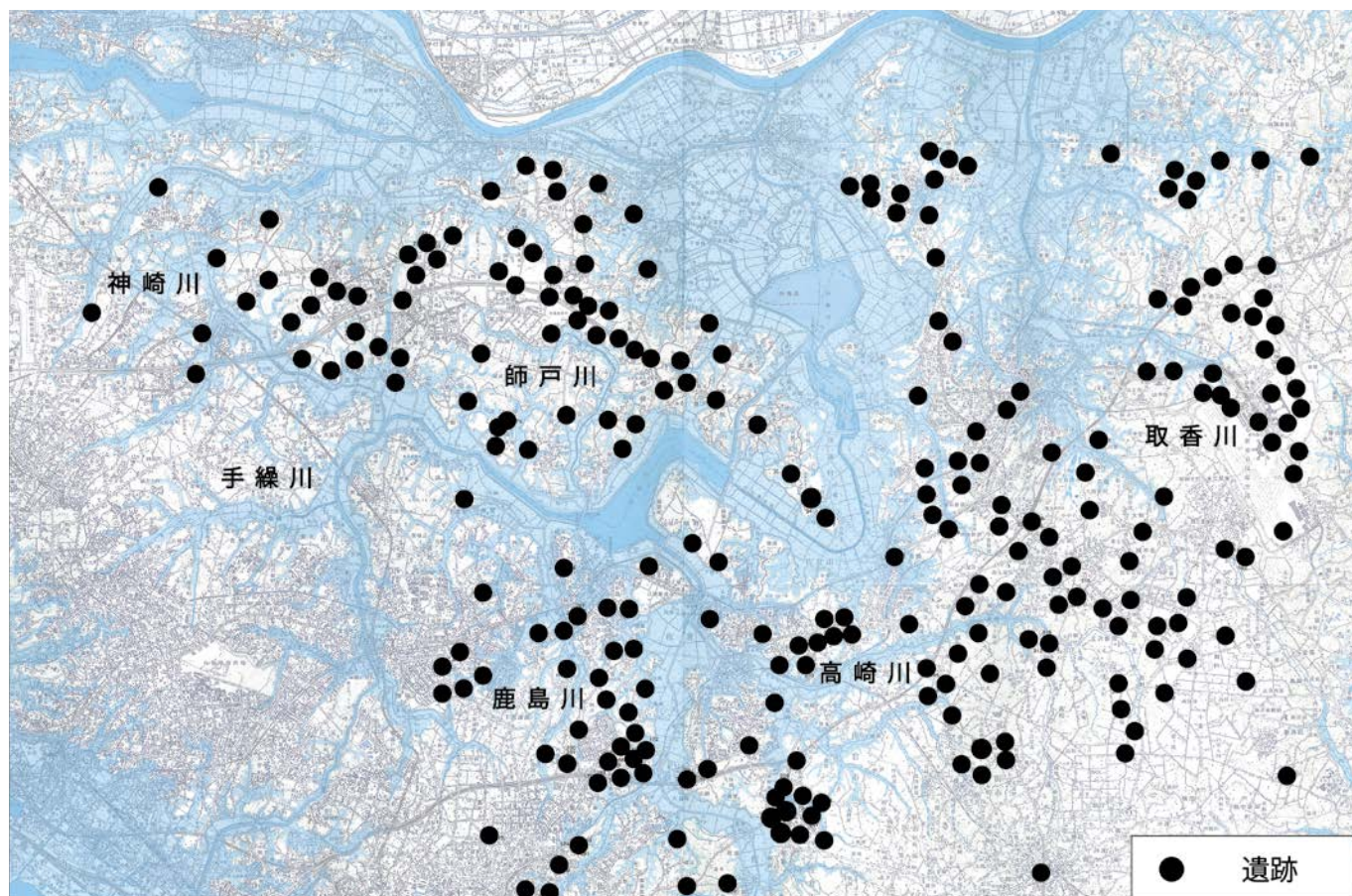
黒色頁岩



黒曜石

印旛地域ではどこで当時の遺跡が確認できるの？

下総台地を含む南関東地方(相模野台地・武蔵野台地)では、小河川に沿った台地の縁辺部に当時の遺跡が多く見つけられます。印旛沼周辺地域では、高崎川、鹿島川、師戸川、取香川、神崎川、手線川などの流域・支流に多く見られます。



地図1 印旛地域の旧石器時代遺跡分布図

大注目!!



印西市東海道遺跡出土 超大型ナイフ形石器について

関東地方で出土するナイフ形石器は平均3～5cm程度であり、今回展示した資料は10cmを超えることから超大型と言えます。石材は東北産の硬質頁岩しょうこんぶんせきが用いられ、使用痕分析の結果、切裁具せつさいぐとして使用されていたことがわかりました。あまり類例がなく、貴重な出土品となります。

法 量

長さ：16.36cm

幅：3.28cm

厚さ：1.00cm



ナイフ形石器

※印西市教育委員会所蔵

縄文時代とは

縄文時代は、土器が使われ始めた約16,000年前から稲作農耕文化が定着していく約2,400年前までの時期を指します。旧石器時代以来の後氷期^{こうりょうき}が終わりを迎えると、日本列島は次第に温暖な気候になっていきました。温暖化によって生じた豊かな自然環境を基盤として食料確保を行い、土器をはじめとする様々な道具を作り、物流・移動による補完で定住を安定させ、精神文化を深めた時代です。1万年以上にわたって続いた縄文時代は、草創期(B.C.14,000～B.C.10,500)・早期(B.C. 10,500～B.C.5,000)・前期(B.C.5,000～B.C.3,500)・中期(B.C.3,500～B.C.2,500)・後期(B.C.2,500～B.C.1,250)・晩期(B.C.1,250～B.C.400)に区分されます。

草創期では、旧石器時代からの冷涼な気候が続き定住は進まず、人々は遊動的な生活を送っていました。早期になると温暖化により気候が安定し、定住を基本とする新しい縄文時代的な生活様式が定まっていきました。前期は温暖化がさらに進み、海水面が現在よりも3mほど高かった時期です。関東平野の奥まで内湾が形成され、それに伴い貝塚が作られました。中期になると気候は現在とほぼ同じになり、本格的に縄文文化が花開き、遺跡の数も増え、大規模集落が出現しました。また、装飾的な土器や石棒、土偶が発達しました。後期になると大規模集落は姿を消していき、集落は分散していきます。中期末に起こった寒冷化や疫病、大規模集落が大型化しすぎたことによる問題などが原因ではないかと考えられています。後期に入ると文様や作りが簡素な深鉢や鉢などの「粗製土器^{そせいどき}」と、丁寧に作られ緻密な文様で飾られる「精製土器^{せいせいどき}」が各器種で作られるようになります。後期では壺^{あさばち}、浅鉢^{ちゅうこうどき}、注口土器など土器の種類が増え、漆文化や祭祀具^{うるしぶんか}が晩期まで発達していきます。また、アケ抜きが必要な堅果類^{けんかうるい}の加工などを目的とした低地への進出も後・晩期の特徴です。

印旛地域の縄文時代

印旛地域の縄文時代は、広大な下総台地^{しもうさだい}と縄文海進^{じょうもんかいしん}によって形成された古鬼怒湾^{こきぬわん}とともに営まれました。草創期の土器や石器は成田市・佐倉市・印西市などで見つかっていますが、住居などの定住が確認できる遺構は未発見です。早期に入ると特に撚系文期^{よりいともんき}に遺跡数が急増します。下総台地の中でも内陸最奥部であり、利根川水系と太平洋水系の分水界で高所の成田国際空港一帯は、空港建設に伴って大規模調査が行われました。その一環で調査が行われた成田市木の根拓美遺跡^{きねたくみ}では早期の土偶が出土し、発見当時最古の土偶として注目されました。

貝塚は全国で約3,900か所ありますが、そのうちの700か所あまりが千葉県に分布しています。千葉市加曽利貝塚^{かそり}や市原市堀之内貝塚^{ほりのうち}など、その大部分が奥東京湾沿岸に分布しています。一方で、現在の印旛沼周辺にも小規模ながら貝塚は形成されました。佐倉市間野台貝塚^{まのたい}では、海の貝であるハイガイが多く見つかり、古鬼怒湾が縄文海進の影響を強く受けていた事が分かります。

前期前半の印旛地域の遺跡数は少なく、分布は印旛沼北岸に偏りますが、後半になると遺跡数は爆発的に増え、分布も広範囲に及びます。中期になると印旛地域にも大規模集落が形成されました。四街道市南作遺跡^{みなみさく}はその代表で、住居が直径160m、短径90mほどの長楕円形の範囲に分布し、その内側に貯蔵^{ちようそう}



成田市木の根拓美遺跡 土偶 早期



印西市馬場遺跡 大型土坑(241号土坑)

けつ 穴・墓穴が分布する環状集落です。

後期の印旛地域の貝塚は大部分を汽水(海水と真水の混じった水)の貝が占めるようになり、温暖化を背景とした海進が終焉を迎え、海退が本格的に起こっていることが分かります。後期になると大規模集落の分散化が起こった一方で、印旛地域では佐倉市井野長割遺跡・吉見台遺跡・宮内井戸作遺跡などの拠点的な大規模集落も見つかっています。井野長割遺跡・宮内井戸作遺跡、印西市馬場遺跡・戸ノ内貝塚では大型の土坑が検出されています。一般的な土坑の用途として食料貯蔵や死者の埋葬が挙げられますが、それらの大型土坑を調べると形状や出土遺物が貯蔵穴や墓穴とは異なる様相を呈していることが分かりました。

印西市西根遺跡は後・晩期の特徴である低地の遺跡です。赤色漆を塗った飾り弓が出土しており、印旛地域の漆文化の存在を示唆しています。調査の結果、堅果類のアク抜きや漁撈などの作業をした痕跡は認められず、ただ土器を大量に捨てていた場所だと分かりました。その合計は3トンにも及び、後期後半の300年間で捨てられていたと考えられます。大型の完形の土器も出土していることから、低い川岸に大量の土器を持ってくる行為に意味があったと考えられます。また、低地の遺跡ではありませんが、佐倉市井野長割遺跡・遠部台遺跡・曲輪ノ内遺跡でも同様の、土器が集中して廃棄されている「土器塚」が見つかっています。先述した大型土坑や土器塚などは祭祀行為が発達した縄文時代後・晩期の特徴をよく現すものです。

土偶のあれやこれ

土偶とは、縄文時代に作られた人型の土製品です。臨月の腹や乳房の表現から主に女性や母性の象徴として作られ、安産・豊穡・死・再生などの意味を持つと考えられていますが、詳しいことは分かっていません。土偶は縄文時代草創期から晩期にかけて見られ、印旛地域の早い時期のものでは、成田市木の根拓美遺跡で早期の土偶が出土しています。草創期・早期の土偶は、人体の表現が簡素化されているのが特徴です。木の根拓美遺跡の土偶も板状の三角形をしていて、一見すると人の体とは分かりにくいですが、乳房の表現がはっきりとされているものがあります。

遮光器土偶は晩期の東北地方で盛行しました。

最大の特徴は宇宙人の様な目です。イヌイットと呼ばれる北方で生活する人々が、雪による光の反射を防ぐために用いた「遮光器」というサングラスのようなものに形に似ていることから、この名前が付けられました。縄文時代に日本列島を訪れた宇宙人をモデルに作ったのでは？と考える方も中にはいるでしょうが、土偶の特徴的な目の表現の変遷を追うと、遮光器土偶の前段階の土偶から次第に目の表現が誇張されていくことが分かっています。つまり、ある日突然現れた宇宙人の表現や、「遮光器(スノーサングラス)」をかけている表現を施したわけではなく、次第に目の表現を誇張していくデザインが何らかの意味を持っていったと考えられます。



佐倉市吉見台遺跡 遮光器土偶 頭部

佐倉市宮内井戸作遺跡では東北地方から持ち込まれた遮光器土偶が出土していて、縄文時代に地域を超えた交流があったことを示唆しています。

ミミズク土偶は縄文時代後期後葉～晩期初めの関東で盛行した土偶です。目、口、耳が円形で表現されている顔が鳥のミミズクに似ていることからこの名前が付けられました。朱色に塗られる場合が多く、細いウェストも特徴です。頭の表現は櫛や髪型を表し、丸い耳は後期に流行した土製の耳飾りの表現ではないかと考えられています。このように土偶は縄文時代の装飾を考えるうえでも重要な役割を担っています。

土偶のデザインは、写實的ではなく抽象化されているという特徴を持っています。一方で、後期になると

貝形の土製品などの写実性の高いものが散見されるようになります。このような遺物の存在から、縄文人は写実的なものを作る技術を持っていたことが分かります。したがって、抽象化された表現の土偶は、縄文人の想念の世界を表したものであると考えられます。特に遮光器土偶やミミズク土偶は、先述した女性的表現は乏しく「性」あるいは「写実性」からかけ離れた、人ならざる者であると言えます。

縄文人たちが土偶にどんな願いを込めたのかを完全に理解することは難しいですが、異形でありながらどこか親しみのあるデザインと、そこから汲み取れる縄文人の想念の世界が現代の私たちの心を打つのではないのでしょうか。

まるきぶね

丸木舟のあれやこれ

日本列島に暮らした人々はいつごろから舟を使ったのでしょうか。伊豆諸島神津島は氷期で陸地が拡大した状態でも本州と陸続きにはなかったと考えられていますが、本州の旧石器時代の遺跡で神津島産の黒曜石が出土する事があります。この事から旧石器時代から人々は舟を用いていたと考えられています。印旛地域でも34,000年前の環状ブロック群である酒々井町墨古沢遺跡^{すみふるさわ}で神津島産の黒曜石が見つっています。

一方で旧石器時代の舟の実態については、まだ確実な資料は見つかっておらず、動物の皮で作る獣皮舟・草を編んだ草束舟・竹筏舟・丸木舟などの存在が想定されています。

日本列島において確実な資料として見ついている最古の舟は、縄文人たちが使った丸木舟です。丸木舟は1本の木をくりぬいて作られた「舟」です（「船」という漢字は複数の構造材を用いた構造船のことを指します）。丸木舟とともに櫂^{かい}（パドル）が見つかる事がありますが、舟には帆などの付属物が取り付けられた痕跡はなく、推進方法は櫂だけであったと考えられています。

数千年前に遡る、木製品などの有機物の遺物は、無機物の遺物（石器や土器など）とは違い、酸素と微生物の働きによって分解されてしまいます。さらに日本列島の気候は、雨が多く湿度が高いなどの特徴を持ち、酸性の土壌も相まって有機物は残りにくい傾向にあります。しかし、低湿地遺跡^{ていしつち いせき}と呼ばれる湿地に形成される遺跡では、地下水を含んだ土層によって空気が遮断されることにより、有機質が完全には分解されずに見つかる事があります。丸木舟はこういった低湿地遺跡から出土します。



佐倉市宮内井戸作遺跡 ミミズク土偶



新潟県村上市上山遺跡 巻貝型土製品
国立文化財機構所蔵品統合検索システムより引用

これまでに全国で200艘以上の縄文時代の丸木舟が出土しています。印旛郡市域では出土していませんが、千葉県で見つかった丸木舟は100艘を超えます。千葉県北東部のくりやまがわ栗山川・かりあてがわ借当川流域、きゅうづばきのうみ旧碓海周辺での出土が特に多いです。じょうもんかいしん縄文海進の時期から出土数が増え、後・晩期になるとさらに普及していく傾向があります。市川市かみなりした雷下遺跡では早期末の丸木舟が出土し、国内最古例として注目されました。



東京都北区中里貝塚 丸木舟

丸木舟は日本列島の歴史の中で最古の乗り物といえる存在であり、漁撈や人の移動、物の運搬に役立ったと考えられます。サイズは、長さ6-7メートル、幅60センチほどの両側が立った掘り込みの深い大型のものや、長さ3-4メートル、幅50センチほどの小型のものがあります。また底部が平底になるものもあり、河川や内湾など使用する環境に応じて作り分けがなされていたと考えられます。千葉県内では材木としてカヤ・シイ・クリが多く使用されています。また、舟先が対称形であり、どちらが舟首であるのかの判断が難しいという特徴があります。丸木舟には黒く炭化した痕跡が散見されますが、「制作の際に削りやすくするための焼きこみ説」や「虫害防止のための焼きこみ説」などが唱えられています。

縄文土器の形状や文様は時期や地域ごとに大きく異なり、同じ形状や文様の土器を作る地域でひとつの文化圏を形成し、各地域に固有の文化圏が存在したと考えられます。丸木舟が複数出土している匝瑳市たこだていち多古田低地遺跡から在地産ではありますが、新潟県を中心に盛行した三十稲場式の土器が出土しました。現在のところ分かっている縄文時代の移動方法は丸木舟か徒歩しかありません。三十稲場式土器の出土は、丸木舟が各地域の文化圏を超える長距離移動を可能にした事を物語るものと言えます。

縄文時代のひとつの集団の中で何艘の丸木舟が保有され、どういった管理の方法がされていたのかは分かりません。複数の丸木舟が出土した多古田低地遺跡の事例から、ひとつの集団の中で複数の丸木舟が管理されていた可能性が考えられます。また、丸木舟が杭列と共に出土する事例や碇石と考えられる縄をかけた石が並んで出土する事例があり、河岸や湖岸にけいりゅう繫留して管理されていた様子が分かります。

八千代市の印旛沼流域や我孫子市の手賀沼流域では丸木舟が出土していることから、今後の印旛郡市域での丸木舟の発見、さらには、低湿地遺跡の調査の成果が蓄積されることにより、縄文人の丸木舟の利用の実態に迫ることが期待されます。



匝瑳市多古田低地遺跡 櫂

弥生時代とは

弥生時代は今から約2,300年前から約1,700年前頃までの時期を指します。人々は縄文時代以来の採集に加え、新たに農耕を始める時期です。関東地方では神奈川県小田原市の中里遺跡^{なかざと}などで水田への水路を思わせる木杭列が見つかったほか、各地の土器から^{もみあっこん}（土器に付着した粃殻が焼けて無くなり、空洞状になった痕跡）が見つっています。

土器の様相も縄文時代とは異なり、縄文土器に似た“甕形土器”^{かめがた ど き}の他に、より貯蔵に適した“壺形土器”^{つぼがた ど き}が出現します。土器以外の道具としては土掘りや伐採に用いる斧がありますが、この斧にも変化が見て取れます。弥生時代の斧は、はじめ“磨製石斧”^{ませいせき ふ}と呼ばれる石を割って形を作り研ぎあげた石の斧が用いられますが、次第に鉄の道具が現れ^{てっ ぶ}“鉄斧”に置き換わっていくと考えられています。このような変化は斧だけでなく、^{やじり}鍬などにも見られます。

集落は多くの場合台地の上に営まれます。多くはありませんが“環壕”^{かんごう}と呼ばれる壕を巡らせた集落を造る場合があります。印旛地域では佐倉市大崎台遺跡^{おおさきだい}が環壕集落として有名です。住居跡の形態は縄文時代と同じく地面を掘り窪めた“竪穴式住居”^{たてあなしきゆうきょ}ですが、縄文時代の住居跡が円形に近いものが多いのに対して、隅丸方形^{すみまるほうけい}（四角を意識しながらも、隅の部分や壁が丸みを帯びた形）の住居に造るようになります。

お墓の様子は縄文時代以来の土坑墓や土器棺墓の他に、“方形周溝墓”^{ほうけいしゅうこう ぼ}と呼ばれるお墓の周囲に溝を巡らせるものが現れます。

いままでご紹介したように、弥生時代はそれまで営まれていた縄文時代以来の生活に、朝鮮半島をはじめとする大陸の文化が入ってくる時期です。全国各地で受け入れられ方や受け入れる内容、受け入れるスピードは異なりますが、人々の生活に大きな変化が起きた時代と言えるでしょう。

印旛の弥生時代

弥生時代の印旛地域は“東京湾西岸^{とうきょうわんせいがん}からの弥生文化”と“霞ヶ浦北岸^{かすみ が うらほくがん}からの弥生文化”の接触地帯でした。土器の様相から見ると弥生時代中期後葉では宮ノ台式土器^{みやのたい}など東京湾沿岸地域の帯状の縄文帯を特徴に持つ土器と足洗式土器^{あしあらい}などの東北地方南部から茨城県や栃木県などに分布の中心を持つ渦巻文や同心円文^{うずまきもん どうしんえんもん}を特徴に持つ土器が出土します。また後期には久ヶ原式^{く が はらしき}などの東京湾西岸の幾何学的な文様を特徴に持つ土器と、十王台式^{じゅうおうだいしき}などの茨城県域の頸部に櫛状の道具で梯子^{はし こ}のような文様を描く土器、そしてその影響を受けた大崎台式^{おおさきだいしき}などの在地の土器が見られます。

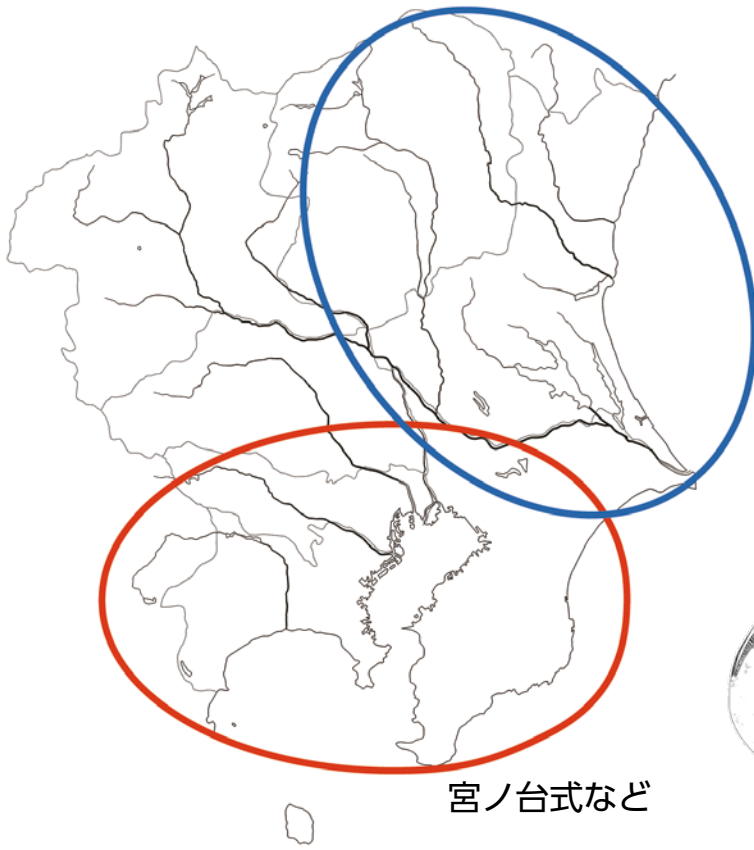
また前述の通り佐倉市大崎台遺跡^{おおさきだい}では、東京湾沿岸に中心を置く“環壕”^{かんごう}が確認されています。

お墓についても北関東に中心を置く“壺棺再葬墓”^{つぼかんさいそう ぼ}が佐倉市岩名天神前遺跡^{いわ な てんじんまえ}で確認されているほか、東京湾沿岸に中心を置く“方形周溝墓”^{ほうけいしゅうこう ぼ}も確認されています。

環壕を持つ環壕集落や方形周溝墓^{ほうけいしゅうこう ぼ}は北関東方面では確認されていないことから、印旛地域は東京湾西岸に中心を置く文化の北限であったと考えられます。

このように印旛地域は南北の異なる様相を持つ文化の接触地帯ということが出来ます。

足洗式など



足洗式土器



宮ノ台式土器



宮ノ台式など

土器の分布図(中期後葉)

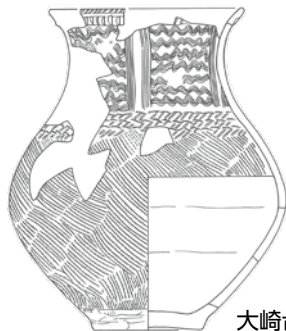
十王台式など



十王台式土器
※ひたちなか市 武田石高遺跡



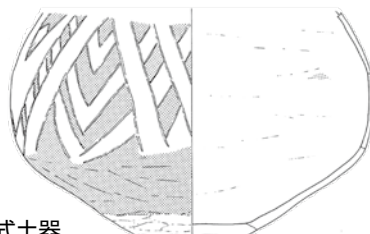
大崎台式
臼井南式



大崎台式土器



久ヶ原式土器



久ヶ原式土器

久ヶ原式など

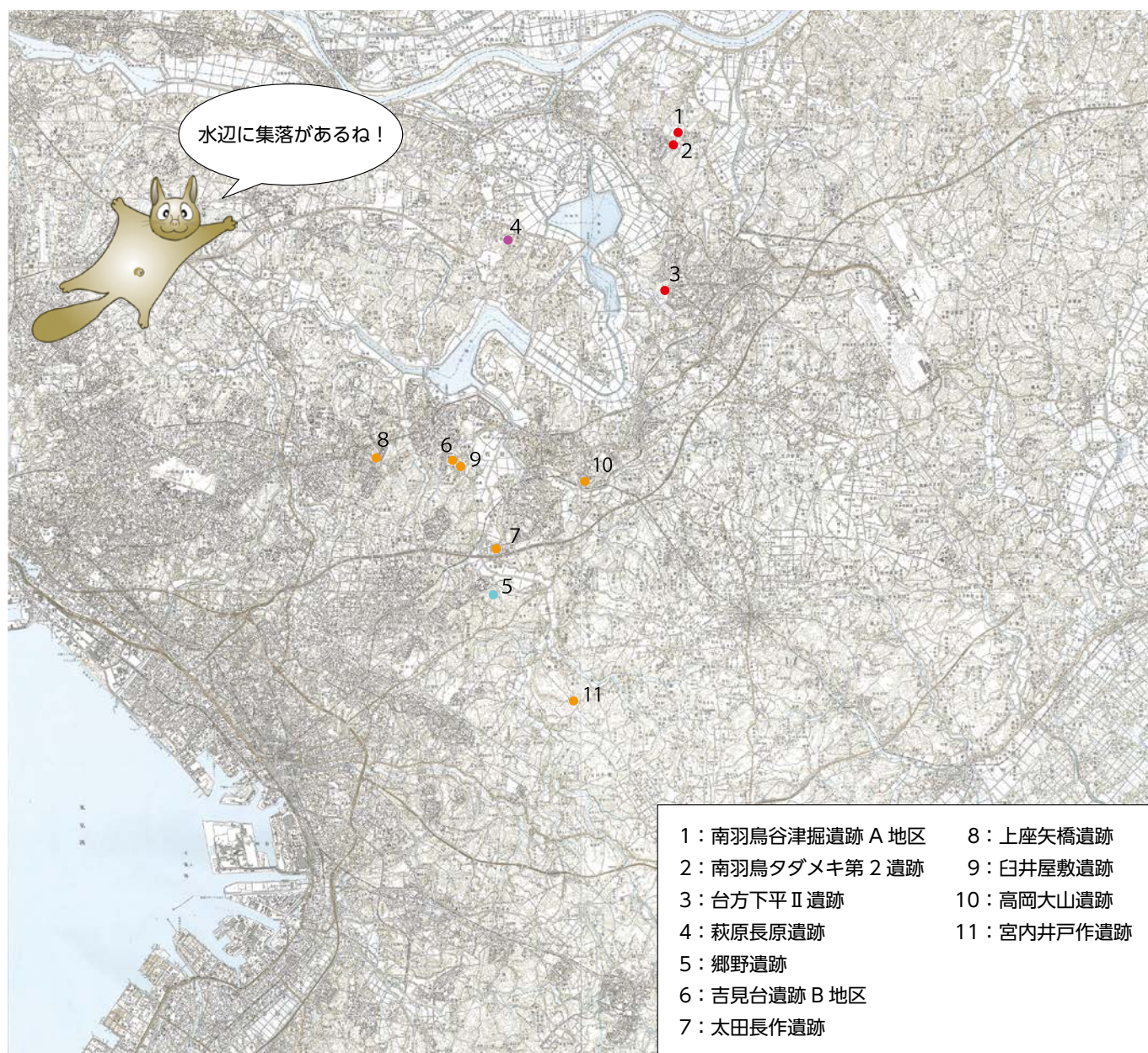
土器の分布図(後期)

印旛の集落

印旛地域の弥生時代の集落はどのようなところにあったのでしょうか。印旛地域は中心部に印旛沼とそこに注ぐ河川があり、北側には鬼怒川水系の河川や霞ヶ浦があります。台地は上記の河川などに開析され、樹枝状に細かい谷が入り込んでいます。

集落の多くはこうした開析された台地の縁辺部に営まれました。集落の大きさや姿は様々で小規模なものから、いくつもの住居が集まり環濠を持つような大規模なものまであります。

集落から出土する土器の構成は時期によって異なりますが、印旛地域で弥生時代の集落が確認できる弥生時代中期後葉～後期にかけては、在地の土器(印旛地域で作られたと考えられる土器)以外に、東京湾の西側で作られた土器や霞ヶ浦周辺や霞ヶ浦以北で作られたと思われる土器が出土しており、河川や海を一つの起点にした人々の交流が見て取れます。



展示で扱った遺物の見つかった遺跡

印旛のお墓

印旛地域には多くの遺跡があることからわかるとおり、どの時代にも多くの人々が生活していました。人が生活している限り、「^{とむら}弔い」は決して切り離すことのできない出来事です。

弥生時代の印旛地域では大きく分けて2種類のお墓があります。それは「^{さいそうぼ}再葬墓」とよばれるお墓と「^{ほうけいしゅうこうぼ}方形周溝墓」とよばれるお墓です。

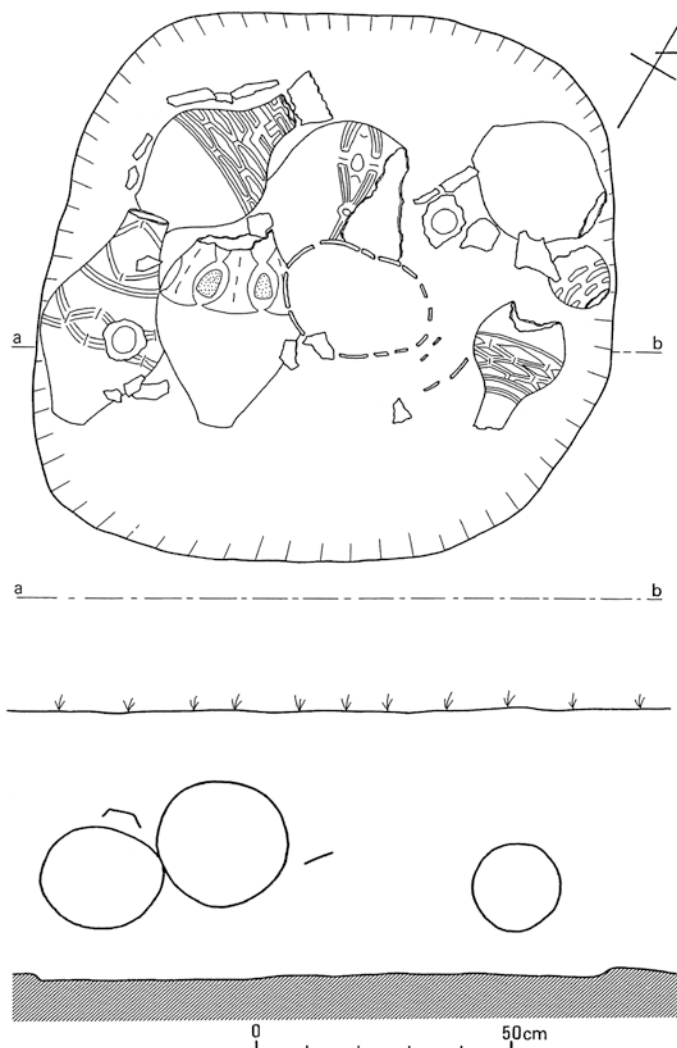
^{さいそうぼ}再葬墓とは

^{さいそうぼ}再葬墓は、亡くなった人をいくつかの段階に分けて埋葬する方法のことを指します。第一段階は亡くなった人の遺骸を骨にする段階、第二段階は骨になった状態の遺骸を土器に収め埋葬する段階です。遺骸を骨にする方法はいくつか考えられますが、①一度土のなかに埋葬して腐敗が進むのを待つ、②遺骸を焼く、③一度埋葬してある程度腐敗が進んだものを焼いて骨にするなどの方法が予想されています。一つの墓坑からは複数の土器が見つかるものが多く、^{くだたま}管玉などの副葬品と思われるものが出土することもあります。

^{さいそうぼ}再葬墓の例は全国に確認できますが、関東地方では北関東で多くが確認されています。また「^{さいそうぼ}再葬墓」という名称の発端になった遺跡は佐倉市に所在する^{いわなてんじんまえ}岩名天神前遺跡であり、^{さいそうぼ}再葬墓と印旛地域との繋がりは非常に深いものです。

^{ほうけいしゅうこうぼ}方形周溝墓とは

^{ほうけいしゅうこうぼ}方形周溝墓は、中央の墓坑（主体部）とその周囲を囲む四角い溝で構成されたお墓です。周囲を囲む溝は①四隅が切れている場合、②対角線状に切れている部分があり、L字の溝2本で囲まれているような場合、③隅ではなく真ん中一箇所が切れている場合、④切れている場所がなく、ぐるっと溝が回る場合などいくつかの形があります。主体部はそれ自体が見つからないことも多いですが、人骨や副葬品が見つかる例や、木でできた棺が見つかることもあります。^{ほうけい}方形周溝墓は単独で見つかることもありますが、多くの場合がいくつかの^{ほうけいしゅうこうぼ}方形周溝墓が規則的に並んで見つかります。



岩名天神前遺跡 第2号墓墳

※岩名天神前遺跡の報告書から引用・修正



寺崎向原遺跡の方形周溝墓群

※寺崎向原遺跡の報告書から引用・修正

こふんじだい 古墳時代とは

「古墳時代」とは一言でいうと「古墳」が造られた時代のことを指します。

古墳は、土を高く盛り上げた墳丘をもつお墓のことを指し、3世紀中頃から7世紀にかけて、日本各地に造られました。その形は様々であり、鍵穴のような形をした前方後円墳をはじめ、前方後方墳、円墳、方墳などバラエティーに富んでいます。古墳は各地の豪族や有力者などが埋葬されており、古墳の形状、大きさによって埋葬された人の身分や階層を示しています。また、古墳の中には埋葬施設があり、^{たてあなしきせきしつ} 竪穴式石室と^{よこあなしきせきしつ} 横穴式石室がその代表例として挙げられます。これらの埋葬施設の中には埋葬された人への供物（副葬品）が入っています。

古墳時代は、時期によりその様相が異なり、前期（3世紀中頃～4世紀後半）、中期（4世紀後半～5世紀末葉）、後期（6世紀～7世紀）の3時期に区分されます。

前期は、日本最古の前方後円墳である^{はしはか こふん} 奈良県箸墓古墳をはじめとし、奈良県大和地方を中心に古墳が造られる時期になります。この時期の埋葬施設は竪穴式石室が主流であり、古墳の中に入れられる副葬品は^{さんかくぶちしんじゅうきょう} 三角縁神獣鏡、^{うでわ} 腕輪型石製品など祭祀に使用されるようなものが中心でした。

中期では、古墳が全国的に造られるようになる一方で、河内（現在の大阪府）に巨大な前方後円墳が造られるようになります。日本最大の前方後円墳であり、世界遺産にも登録された^{もす} 百舌鳥・古市古墳群の中の一つである^{だいせんりょう こふん} 大仙陵古墳が造られた時期も、この時期になります。

また、この時期になると朝鮮半島より^{すえき} 須恵器やカマド、馬など新しい文化が伝来します。これらをまとめて渡来文化といい、伝えにきた技術者たちを渡来人といいます。一部の地域では、古墳の埋葬施設が、従来の竪穴式石室から、新たに伝来した横穴式石室へと変化していきます。

後期は、巨大古墳の造営が落ち着き、日本各地で10m前後の小さな古墳がまとまって造られる時期になります。この古墳の集まりを^{ぐんしゅうふん} 群集墳といい、日本の古墳の大部分を占めています。この時期になると、中期に伝来してきた渡来文化が一般的に普及し、古墳の埋葬施設には横穴式石室が使われ、人々が生活する^{たてあな} 竪穴式住居のほとんどにカマドがつくようになります。

なお、後期のうち、前方後円墳の造営が停止し、^{はちかくふん} 八角墳が造営される7世紀中ごろ以降を終末期と呼ぶこともあります。

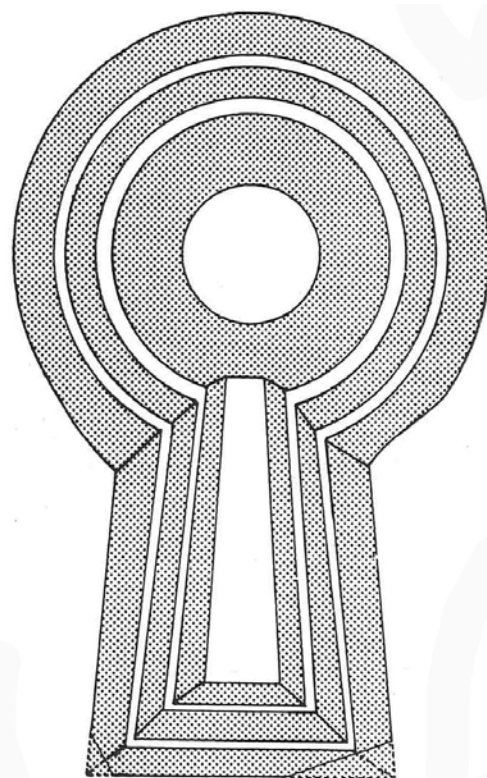
さて、約400年にわたって造られてきた古墳ですが、^{りつりょうこっか} 律令国家の開始により、身分や階層を示すものは古墳の大きさや副葬品の豪華さではなく、法律によって決められるようになり、墓の規模を制限する^{はくそうれい} 「薄葬令」（646年）が出されるなど、社会の変化とともにその姿を消すことになります。

印旛の古墳時代

現代においても、日本各地それぞれに地域の特色や、特産品があるように、古墳時代においても、その地域における特徴がありました。ここでは古墳時代における印旛地域の特徴を4つ紹介します。

玉作り

石製の祭祀具、装飾具を総称して「玉」と呼び、これらの石製品を作っていた工人が住んでいたことがわか



る遺跡を「玉作り遺跡」といいます。また、玉と総称されていますが、時期や素材によって、用途の違いが見受けられます。

まず、装飾品である管玉は、^{くだたま}緑色凝灰岩を使用しており、これらの工房は、古墳時代前期に多く見られ、関東地方においては神奈川県、茨城県にも確認できます。房総地方においては印旛沼東岸や利根川沿いに確認することができ、特に成田市に多く、千葉県指定史跡「八代玉作^{やっしらたまつくり}遺跡」や、外小代遺跡^{いせき}などが存在します。

次に滑石^{かつせき}という石材を加工し、主に農耕具、工具、武器等を模した滑石製模造品^{かつせきせいもぞうひん}が挙げられます。これらは小型の祭器として使われ、古墳時代中期から後期にかけて生産されました。工房は、印旛沼周辺をはじめ東京湾北東岸域、東岸域、多古町、芝山町方面に分布し、先述した緑色凝灰岩を加工していた工房に比べ、非常に広い範囲で確認されています。今回の企画展で展示されている栄町前原Ⅰ遺跡^{さかえまちまえはら}もその中の一つです。

石枕

「石枕」とはその名の通り、石で作られた枕であり、馬の蹄のような形をしています。これらが出土する場所が古墳の埋葬施設であることから、死者のために作られたものということがわかります。

石枕は主に古墳時代中期に作られ、関東では茨城県南部から千葉県北部(常総地域)に集中しています。分布が集中する地域は元々「香取海^{かとりうみ}」と呼ばれる内海が存在する地域であり、石枕が出土する遺跡は沿岸部に多く見られることから、水運を差配した豪族に関係するのではないかとされています。

石枕は石棺に直接造り付けられているものや、常総地域でみられるような単独で作られるものが確認されています。なお、「立花^{りっか}」を伴う石枕は常総地域にのみ見られる特徴であるため、当地域の石枕を「常総型石枕^{じょうそうがたいしきくら}」と呼びます。印旛郡市文化財センターが発掘した成田市台方宮代遺跡^{せきふなかたてぐらごうふん}、船方手黒1号墳^{ねこさくくりやまこふんぐん}から石枕が出土しています。また、成田市猫作・栗山古墳群第16号墳から出土した石枕をはじめとした副葬品は県の指定文化財にもなっています。



栄町前原Ⅰ遺跡 3号住居出土滑石



船形手黒1号墳 石枕

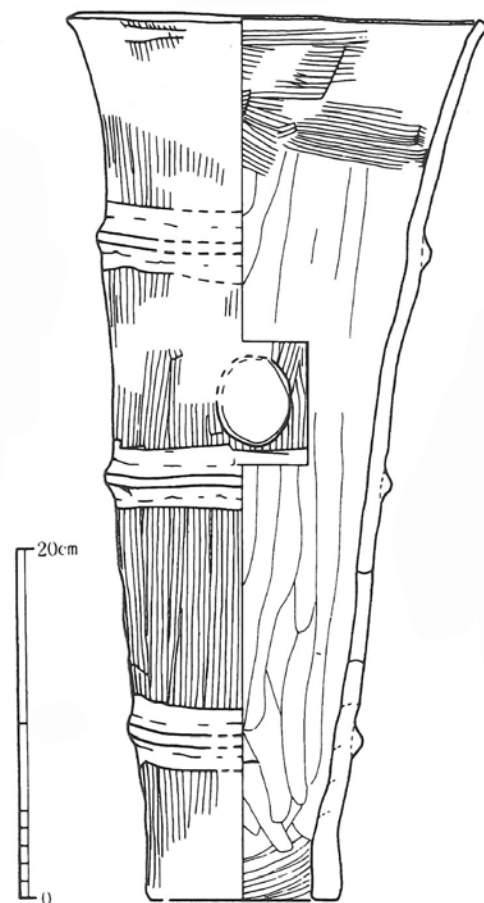


船形手黒1号墳 立花

しもうさがたはにわ 下総型埴輪

埴輪は、古墳に並べ立てられた素焼きの焼物の総称であり、古墳時代を通じて使用されました。埴輪の起源は弥生時代末期、岡山県吉備地方の墳丘墓にみられる特殊壺・特殊器台が発展したものと考えられています。埴輪は大きくわけて筒状の形をした円筒埴輪と、人物や動物、器財などを象った形象埴輪にわけられます。印旛地域においては古墳時代後期から多く見られるようになり、印旛都市文化財センターのシンボルでもあるムササビ形埴輪が出土した成田市南羽鳥正福寺1号墳もこの時期になります。このムササビ形埴輪も非常に特徴的ですが、ここではその時期から少し後に出現する「下総型埴輪」について紹介します。

下総型埴輪は印旛沼・手賀沼周辺域を中心に分布している同一規格の埴輪であり、円筒埴輪は3条の突帯を有し4段構成になっています。また、形象埴輪は人、馬、家、鳥など種類が豊富ですが、下総型埴輪は種類が少なく、人物埴輪のほかに馬形埴輪が伴う程度となっています。この規格化された埴輪は古墳時代の後期後半に出現し、現在の茨城県南部、埼玉県東部、東京都東部、千葉県内では上総地域北縁まで広がっていきます。



下総型埴輪
(印西市大木台2号墳)

コラム・珍しい埴輪たち

印旛都市文化財センターのシンボルマークとして使われているムササビ形埴輪ですが、これは全国的にみても類例のない珍しい埴輪です。復元された姿からムササビ特有の飛膜を広げて滑空する様子が表現されていることがわかります。

動物を模した埴輪は、馬や鳥、犬、鹿、猪などが多く見受けられますが、中には猿や魚、牛などといった動物も見られるところもあります。なお、ムササビ形埴輪が出土した成田市南羽鳥正福寺1号墳からも魚形埴輪も出土していますが、尾ひれや体形などから、魚の種類が「ボラ」であることが判明しています。



南羽鳥正福寺1号墳 ムササビ形埴輪



南羽鳥正福寺1号墳 ボラ形埴輪

馬

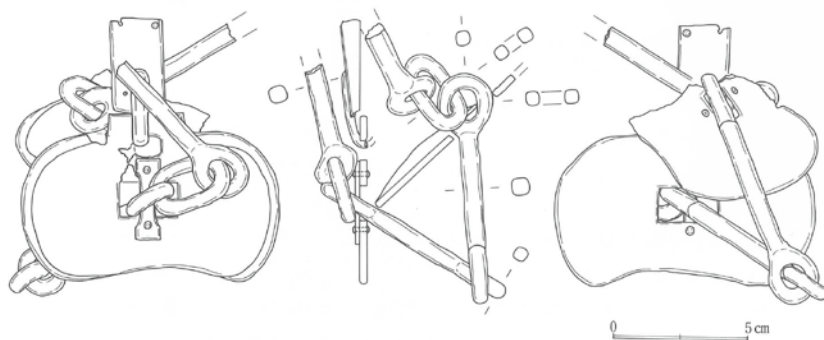
馬は古墳時代中期、朝鮮半島から伝来し、乗用、運搬、農耕などに使用されていました。「馬がいた」ということを証明する遺物として、馬具、馬形埴輪、そして、馬の骨が挙げられます。

印旛地域における馬の存在は、佐倉市大作31号墳1号土壇出土の馬の骨、馬具が代表例として挙げられます。大作31号墳は5世紀末に築造された円墳であり、1号土壇は周溝外縁にかかるように掘られており、土壇の底部より轡を装着した状態の馬歯が出土しました。また、同じ土壇からほかの馬具も見つかっており、馬一頭が馬具を装着した状態で埋葬されたことが判明しました。加えて、見つかった位置が不自然であることから、馬の頭部が切断された状態で埋葬されたことがわかりました。古墳の近くにおいて馬が埋葬される例は長野県飯田市に多く見られ、これらは被葬者に対する殉葬であると考えられており、当遺跡における馬も被葬者への殉葬の可能性が高いものと考えられます。

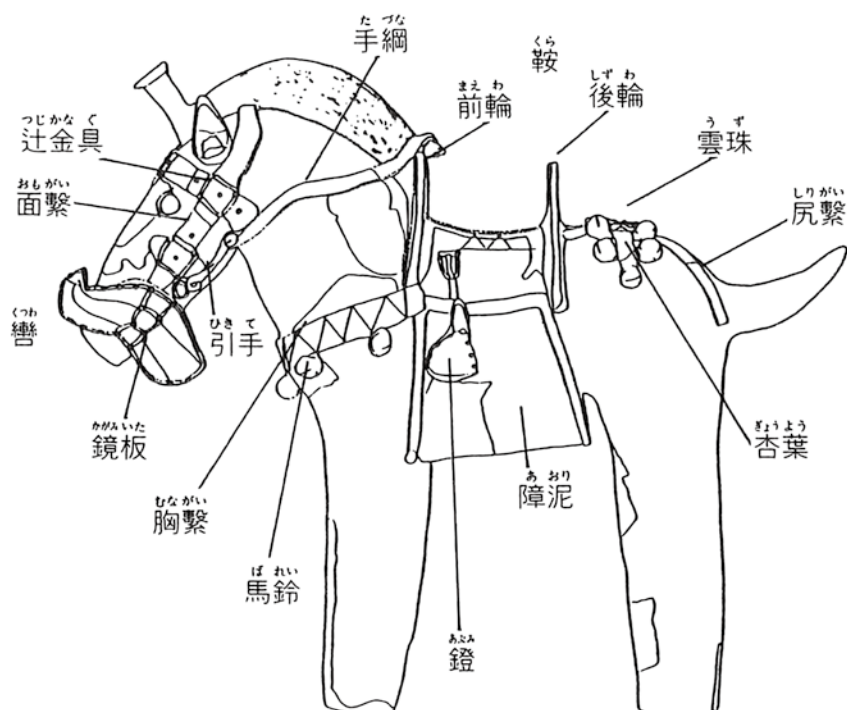
また、馬がつけていた轡ですが、これは鉄製楕円形鏡板付轡といい、印旛郡内では印西市吉高浅間古墳からも同様の轡が出土しています。房総地方において馬具が出現するのは5世紀後半から末であるため、印旛地域においてこれらの馬具が出土するということは、この地において、きわめて古い段階から馬がいたことを示しています。



殉葬の想像図



吉高浅間古墳 轡



馬具名称

奈良時代・平安時代とは

奈良時代

一般に奈良時代とは、大和国(現在の奈良県)に平城京が置かれた710年からの時代を言い、飛鳥時代から続く律令制を基にした政治が行われました。この時代で最も有名であるのは、聖武天皇による東大寺の大仏建立でしょうか。仏教の力によって国家を治める鎮護国家の思想から、全国的に寺院が建てられました。現在でも地名として多く残る国分寺は、遺跡として多くの発掘調査が行われています。奈良時代は、わずか84年の時代ではありますが、平城京や仏教文化など、唐(現在の中国)からの影響を多く受けた国際色豊かな時代であるといえるでしょう。

ポイント!!

先代の飛鳥時代は考古学上では古墳時代後期～終末期にあたり、印旛地域では、多くの文字瓦が出土した龍角寺五斗時窯や、栄町にある岩屋古墳が築造されました。奈良時代の政治の基礎となる律令制がつくられた時代で、全国的な政治体制が整えられてきた時代であると考えられます。



東大寺盧舎那仏(大仏)

平安時代

奈良時代から続く平安時代は、794年に山城国(現在の京都府)に平安京が置かれたことにより始まった時代です。一般的な平安時代といえば、宮中の貴族による華々しい時代のイメージでしょう。『源氏物語』や『枕草子』など、多くの文学作品や和歌などの文化が発展した時代です。私たちが現在使っている平仮名もこの時代に生まれました。また、現在の仏教宗派の開祖ともいわれる空海や最澄が活躍した時代であり、海外からの影響を受けた宗教観ができてきた時代です。平安時代は、唐からの影響を受けながらも、日本独自の文化が発展していった時代なのです。

ちなみに、中央では貴族たちが先進的な文化を取り入れて生活をしている一方で、地方の人々は、文化的・政治的影響を受けながらも集落を築き、竪穴住居に暮らす、縄文時代以来の生活を営んでいたと考えられます。印旛地域でも多くの集落遺跡が発掘調査により見つかっており、至るところで人々の暮らしの痕跡を見ることができます。

一方で、平安時代は、華々しい文化の裏に、戦や政変といった多くの出来事が起きた時代でもあります。東北の蝦夷との戦いや、太宰府天満宮で有名な菅原道真の左遷はその代表的なものでしょう。

当時の貴族などは、そのような自身への脅威に対して、警備や内乱の鎮圧などにあたる武士を従えるようになります。この武士たちが力をつけていき、平安時代末には武士が実権を握ることになるのです。そして続く中世には、武士を中心とした政治が行われ、動乱の時代へ進んでいくことになるのです。



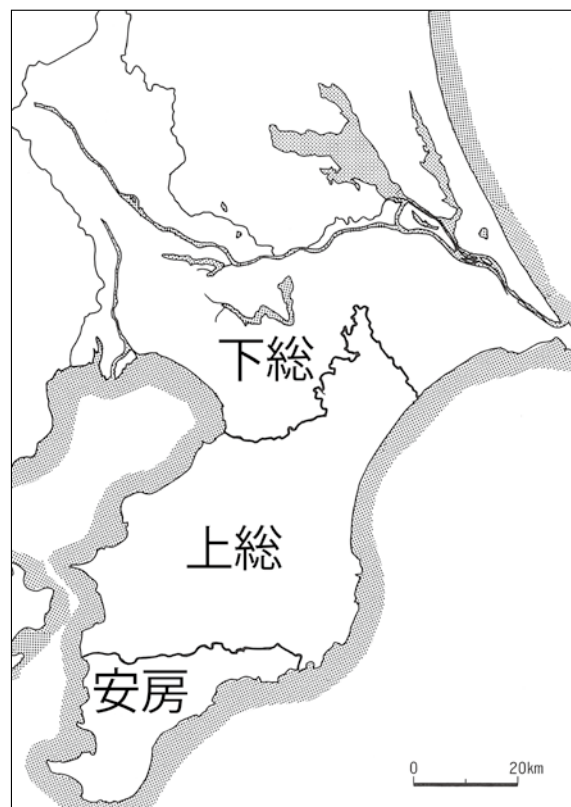
『源氏物語画帖』(国文学研究資料館所蔵)

房総半島の奈良・平安時代

房総半島はかつて「^{ふさ}掬の国」と呼ばれていました。掬というのは奈良時代の木簡に書かれている言葉で、「盛る」という意味と、「^{ふさ}房をなして稔る果実」の意味があります。また、平安時代初期の『古語拾遺』という書物には、麻の別名である「^{こごしゅう}総」の名をとって「^{ふさ}ふさ」の国と名付けたという説話があります。現在も地名として残る、「^{かずさ}上総」「^{しもづさ}下総」は、飛鳥時代に起きた政変である大化の改新後に、「^{ふさ}ふさの国」を二分してつくられました。その後、奈良時代である718年に、南端である「^{あわ}安房」がつくられました。奈良・平安時代の房総半島は3つの国によって構成された地域なのです。

律令体制下における地方の政治は、^{こくが}国衙や^{ぐんが}郡衙によって行われました。房総半島も例外ではなく、3つの国にはそれぞれ国衙が置かれ、その下にある郡には郡衙が置かれていました。国衙は今で言う県庁、郡衙は市役所・町役場のようなものです。また、国衙を中心とした都市を国府、郡衙を中心とした都市を郡府ということもあります。房総半島では、国衙や郡衙が発掘調査や伝承により、位置が推定されています。印旛地域に関しては印旛郡と^{はにゅうぐん}埴生郡という2つの郡があり、そのうち埴生郡衙は栄町の大畑Ⅰ遺跡が候補として推定されています。国衙や郡衙の解明がさらに進めば、房総半島における政治の動きや文化の流れなどが、より多く明らかとなることから、さらなる研究と発見が待ち望まれます。

また、この時代の発掘調査では^{ぼくしよ}墨書土器と呼ばれる、土器に文字が書かれたものが出土することがあります。その多くは、宗教的な呪いのためと思われるものが多く、「^{まじな}国玉神」や「^{おおふくろこしまき}奉」と書かれたものや、祈りの文言が書かれたものもあります。今回展示を行った、成田市の大袋腰巻遺跡から出土した「^{やぎやまのた}印波郡」と書かれた土器や、佐倉市の八木山ノ田遺跡から出土した^{おおはた}仏面墨書土器もこの一種です。「国玉神」がどのような神を示しているのかは不明ですが、おそらく在地信仰における神であると予想できます。また、仏教の影響を受けたと思われる^{おおはた}仏面墨書土器も、仏教の広がりを考えることのできる貴重なものでしょう。いずれも延命や^{はらえ}祓を意味するものと考えられ、当時の人々の信仰が垣間見える貴重な資料です。



房総三国図

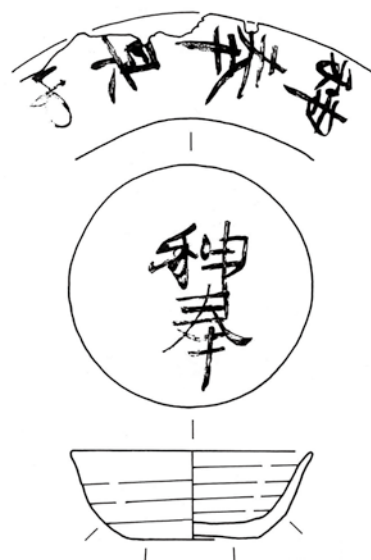
※『千葉県の歴史』通史編古代2から引用・加筆



佐倉市八木山ノ田遺跡 仏面墨書土器



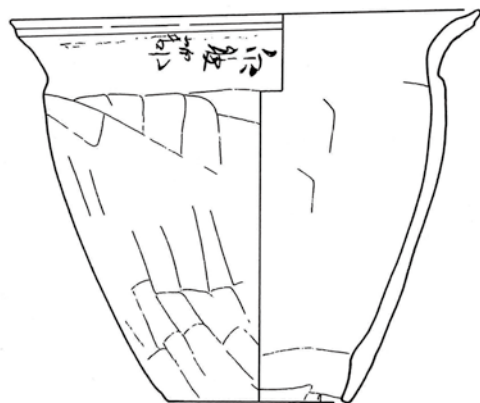
成田市大袋腰巻遺跡 墨書土器



コラム・印旛と埴生

印旛郡は一般に、千葉県北西部にある印旛沼を中心とした一帯のことを指します。この地域は10世紀に編纂された「倭名類聚抄」^{わみょうるいしゅうしょう}にも「印旛」と記載があり、成田市の大袋腰巻遺跡からは、墨書で「印波郡」と書かれた8世紀初頭の甕^{こしき}が出土しています。この遺物と同時期の721年に成立した『常陸国風土記』^{ひたちのかくにふどき}にも、景行天皇の巡行の際、下総の国の「印波」の鳥見の丘に登って国を望んだというエピソードが出てきます。「印旛」の語源は定かではありませんが、当時は千葉県北部から茨城県南部にかけて広大な内海が広がっていたと考えられています。印旛沼もその中の一つの浦であり、波の立つ海を見続けてきた人々が名づけたとも考えられるのではないのでしょうか。

また、現在は印旛郡に含まれている成田市や栄町の一部は、かつては埴生郡と呼ばれていました。埴生郡には、全国最大規模の方墳である岩屋古墳があり、奈良時代より前のこの地域の政治的中心地であったと考えられています。隣り合う印旛郡と埴生郡にはそれぞれ郡衙と呼ばれる役所が置かれ、政治が行われていました。この二つの郡は、平安時代の末期には解体され、貴族などが支配する荘園へと姿を変えていくことになります。



成田市大袋腰巻遺跡 甕

は皮
に尔
ふ負？



栄町龍角寺五斗時瓦窯跡 文字瓦



印旛郡・埴生郡範囲図

※「千葉県の歴史」通史編古代2から引用・加筆

中世とは

中世は、主に平家が滅亡して源頼朝による武家政権が生まれた頃から、関ヶ原の戦いの頃までを指す時代です。鎌倉、南北朝、室町、戦国、安土桃山時代を含んでいます。また室町時代の終わりまでを中世とし、それ以降を近世とする考え方もありますが、今回の展示では安土桃山時代までを中世として取り扱います。

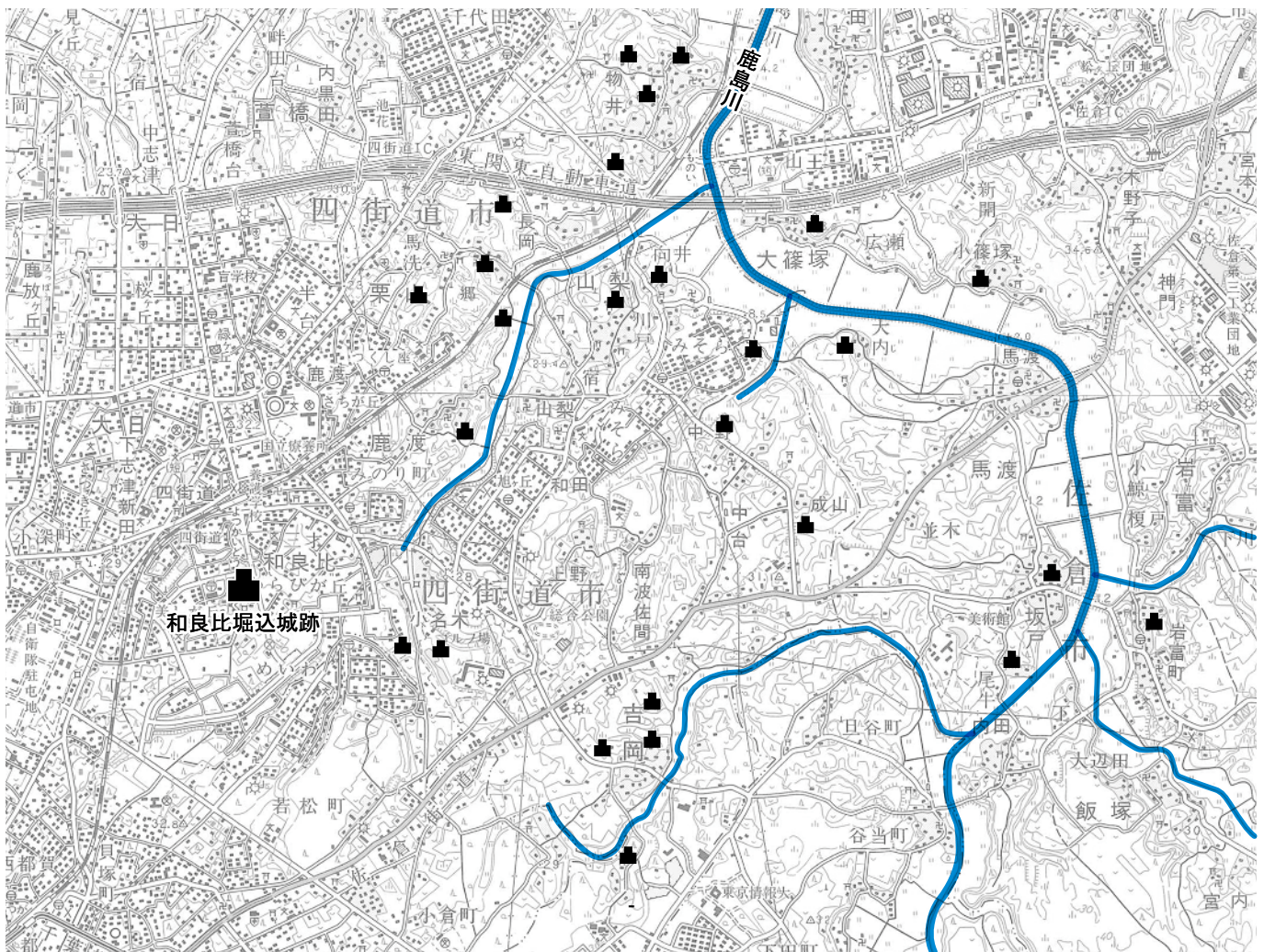
この時代は、各地で形成された武士団が勢力を強め、武士による支配の体制が整った時代でした。しかし、幕府の衰退に伴って戦乱の時代に突入した結果、全国各地で実力ある支配者が台頭し、地域ごとに独自の支配を行うようになります。

戦いに備えるため、各地で堀や土塁などの防禦施設をもつ城が築られました。発掘調査では、このような城跡のほか、領主層などが住んでいたと思われる館跡や土坑墓、大規模な土木工事の痕跡などが検出されます。

中世の印旛

房総では15世紀半ばの鎌倉府の公方足利持氏と幕府・関東管領上杉憲実の争いをきっかけに戦国期が始まったと考えられ、それ以降に城館跡の数が激増しました。下総では千葉氏が台頭しましたが、千葉氏の内部でも様々な派閥に分かれた争いが起こったことがわかっています。

印旛にも多くの中世城館跡が確認されており、千葉宗家の本城から原氏の本拠地となったと考えられる臼井城(佐倉市)や、千葉宗家の本城であった本佐倉城(佐倉市・酒々井町)などの主要な城郭も所在しています。特に佐倉市から四街道市にかけての鹿島川・高崎川流域には城館跡が密に分布することが知られており、当地域が中世の要衝であったことが推察されます。



城館跡分布図 (1/50,000)

コラム・中世のやきもの

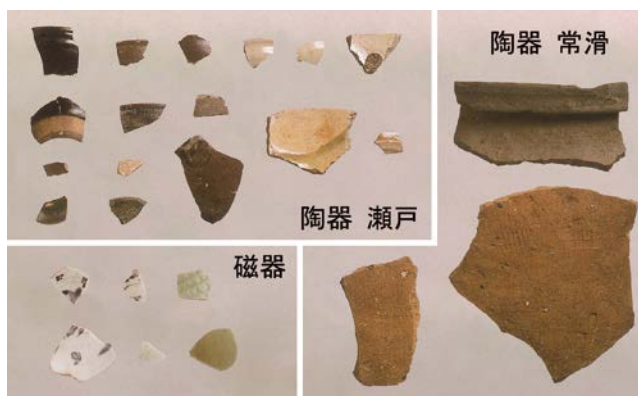
中世になると、これまで作られてきた土師器や須恵器などの土器の技術を継承・発展させたやきものが作られるようになります。考古学の世界では、中世に日本で作られたやきものを大きく土器と陶器の2種類に分けます。

土器は、土師質土器と瓦質土器の2つにさらに分けることができます。土師質土器はその名のとおり古代の土師器の技術を継承して

作られたやきものです。瓦質土器は古代の土師器の仲間である黒色土器の技術を継ぐもので、焼成の最終段階でやきものに炭素を吸着させるため、表面が黒色をしているのが特徴です。

陶器は、古代の須恵器の技術を継承しているものと、古代の灰釉陶器(灰を釉薬として作られたやきもの)の技術を発展させたものがあります。展示している陶器は灰釉陶器の技術を継承した瀬戸・美濃産のものと、常滑産のものです。当時、釉のかかったやきものは瀬戸・美濃地域でしか生産されませんでした。

ちなみに中世の遺跡からも磁器が出土しますが、当時の日本ではまだ磁器の生産はできませんでした。磁器はすべて貿易によってもたらされた貴重品であり、このような磁器や同じく貿易品の陶器の出土量によってその遺跡の主の権勢を推し量ることができます。千葉氏の拠点的な城郭である本佐倉城跡からは大量の貿易陶磁器片が出土しており、拠点にふさわしい出土状況となっています。



中世の陶磁器

戦国印旛の最前線 和良比堀込城跡

和良比堀込城跡は、1981年から1990年の期間に当センターによってほぼ全域が発掘調査された遺跡です。この遺跡からも貿易陶磁片がいくつか出土しました。

発掘調査の結果、城を作る際に地面を大規模に削平し、排水にも気を配って造成していたことがわかりました。「馬出」を設けるなどの技巧的な形態を有しており、Ⅰ～Ⅶ郭と名付けられた7か所の郭から構成されています。Ⅰ郭が主郭、Ⅱ郭が副郭と考えられますが、最も規模の大きい主屋はⅡ郭にあり、建物群の配置もⅡ郭の方が整然と並んでいました。主郭はⅠ郭ですが、城主が日常生活を送っていたのはⅡ郭の方であると考えられます。出土した陶磁器から、築城時期は遅くとも15世紀後半、廃城の時期は16世紀後半ということが判明しました。また、堀の底から大量の五輪塔や宝篋印塔、武蔵型板碑といったお墓に関わる石造物が出土した点も注目されます。これらの遺物は和良比堀込城が築城される半世紀～1世紀ほど前のものでした。和良比堀込城の築城以前からこの地には城主の墓域があり、廃城の際に墓域にあったものがまとめて堀に投げ込まれたと考えられます。

残された文字資料をみると、臼井氏の一族に「蔵」氏の名前があり、蔵氏が和良比堀込城の城主であったと考えられます。16世紀前半の小弓公方と古河公方の対立では、臼井氏は小弓公方の側につき、古河公方に味方した千葉氏・原氏と争いました。その際、古河公方側の前線は本佐倉城、対する小弓公方側の前線はこの和良比堀込城であったと考えられています。



和良比堀込城跡 遺構全景

近世とは

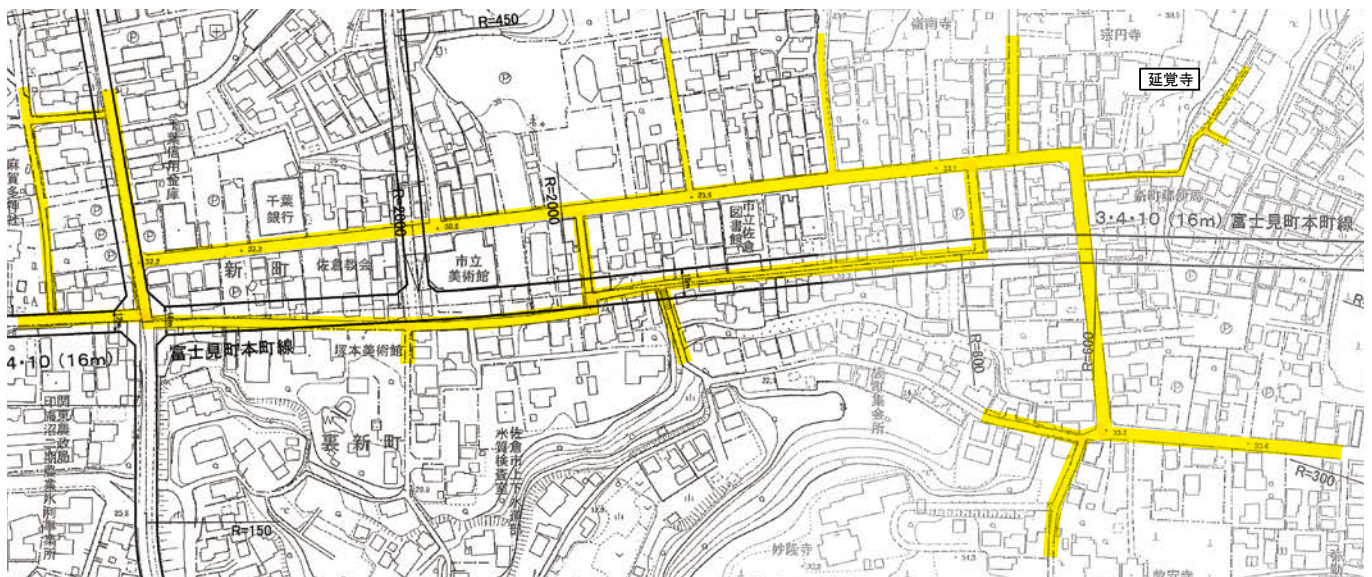
近世とは、江戸幕府の成立(1603年)から明治維新までを指す時代で、江戸時代に重なります。室町幕府の滅亡以降を近世として扱う考え方もありますが、今回の展示では江戸時代のみを近世として扱います。

近世は江戸幕府を頂点として各地に藩がおかれ、将軍と大名による統治が行われた時代です。それぞれの藩にはある程度の自治が許されており、藩政を担う城を中心とした城下町が栄えました。

近世の印旛

近世の印旛には現在の佐倉市に佐倉藩が、現在の成田市に高岡藩がおかれました。佐倉藩は現在国立歴史民俗博物館が所在する佐倉城を中心として城下町が発達したほか、藩主が蘭学を推奨したことで学問の町としても発展を遂げました。のちに老中^{ろうしゅう}を務める人物が多数藩主に就任したことから、佐倉城は老中の城としても知られます。城下町の町割り^{ちよっかつち}は現在にも残されており、街並みからかつての様子をしのぶことができます。

また現在の千葉県には広大な幕府の直轄地があり、広い台地を利用して牧が営まれていました。印旛にも小金牧の一部である印西牧と佐倉牧と呼ばれる牧が整備され、馬の生産が行われていました。現在でも、牧^{のまど}に関わる野馬土手や捕込^{とっこめ}などの遺構や野馬捕りの様子を描いた絵図などが各地に残っています。



現在の佐倉市新町付近

佐倉新町絵図(嘉永元年)



近世の佐倉市新町付近 (『佐倉市史』より引用・改編)

佐倉城下に暮らす人々

藩政の中心地となる佐倉城の城下町には、町人や佐倉藩主に仕える武士など、多くの人々が暮らしていました。佐倉城とその周辺を描いた絵図には、宮小路や本町などの城下町のほか、周囲の村の名前にも現在にも残る地名をみることができます。

佐倉城の城内や大手門から新町の間にかけての地域には、主に上級から中級の藩士が住んでいました。絵図上に赤色で示されている地域は、町人が住む町です。絵図上に仲町などと書かれている新町は、主に日常的に使う品を取り扱う商人が住まう地域でした。本町は成田山へ向かう人々の休憩所として栄えた宿場町であったようです。弥勒町は当初は村でしたが、両隣の町の発展に伴って町となった地域でした。田町には職人が多く住んでいたほか、江戸方面へ向かう人々の宿場町の役割を果たしていま



佐倉市 佐倉城跡天神曲輪出土陶磁器

した。佐倉城を挟んで反対側の地域には、足軽屋敷という下級武士が住む長屋がありました。

この地域でも、現在に至るまでに各所で発掘調査が行われています。3つの遺跡を例として、出土した遺物をもとに彼らの生活をのぞいてみましょう。

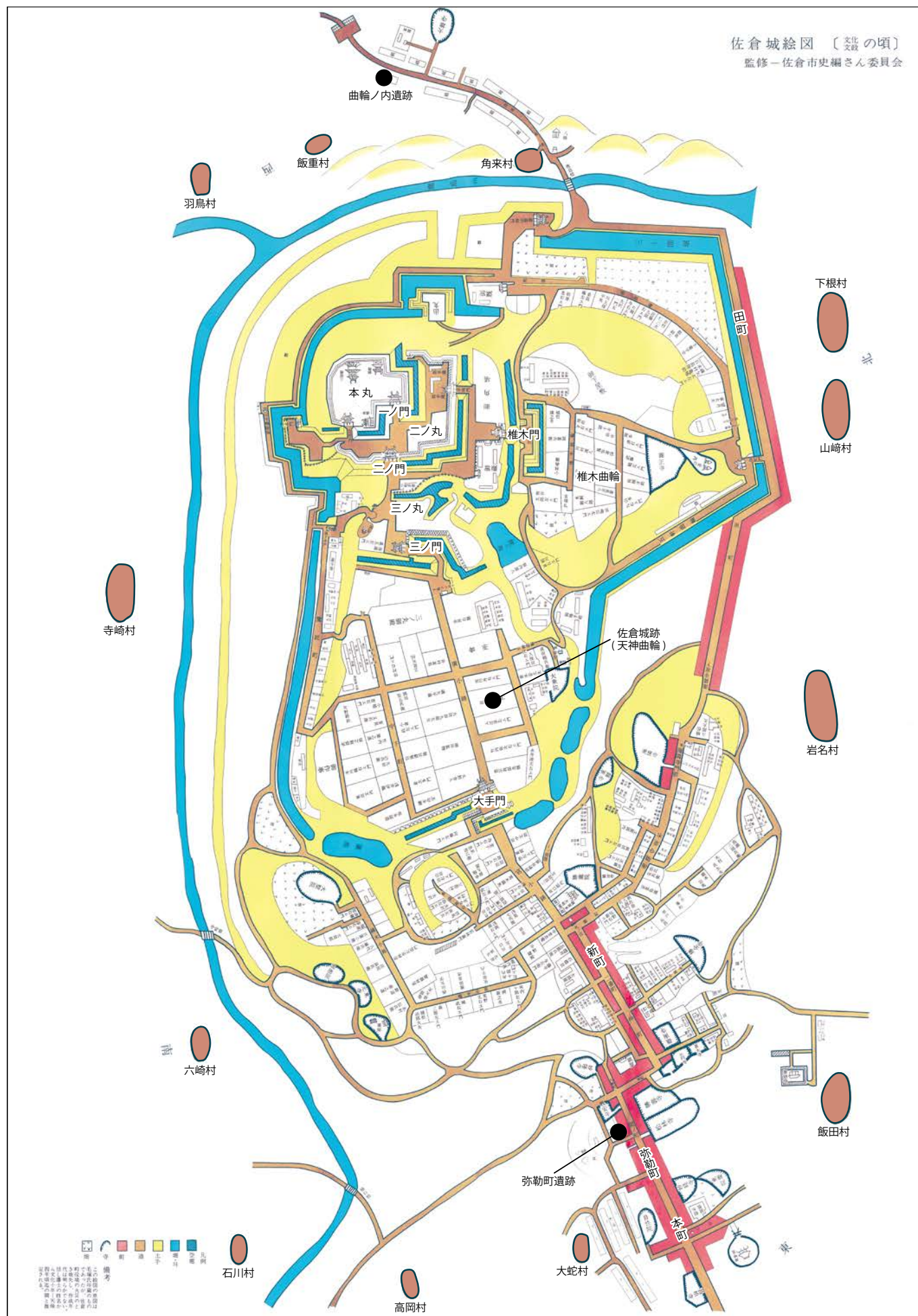
曲輪ノ内遺跡は、足軽長屋とよばれる下級藩士の長屋が立ち並んでいたという記録が残る地域にあります。発掘調査の結果、長方形の掘立柱建物跡が検出され、実際に長屋が建っていたことが確認できました。出土した遺物から、これらの建物は19世紀に使われたもので、一部の場所には17世紀から建物があったことがわかりました。瀬戸・美濃産の日常的に使う食器が多く、19世紀中ごろから増加する急須がいくつか出土しています。また火災の形跡があり、火事の後に穴を掘って陶磁器などのごみを廃棄したことがわかりました。城内にある天神曲輪は、主に上級藩士が住まう地域でした。発掘調査では、18世紀の遺物を中心に出土しており、17世紀後半から良質な遺物がみられます。上級武士の家から出土することの多い高級磁器が出土せず、生活雑器の中に徳利などの酒瓶類が極端に少ないことが特徴で、武家が日頃から質素な生活をしていたことを示すと考えられています。また、京・信楽産をはじめとする陶器の茶碗が豊富に出土しました。この茶碗は茶の湯を嗜む際に使われるもので、上級武士たちが当時の文化人の証であった茶の湯に精通していたことを示しています。

両隣の町の発展にあわせて村から町へと変化した弥勒町には、農民と町人両方の性質をもった人々が暮らしていました。弥勒町遺跡からは、主に18世紀後半から20世紀前半にかけての遺物が大量に出土しました。この地域には18世紀後半から20世紀前半にかけて途切れることなく人が住んでいたことがわかります。また、1714年から流通した正徳一分金というお金が出土しました。一分金は4枚で1両と同じ価値になるお金で、価値の高いものでした。当地で建物を建てる際に行った地鎮祭で奉納されたものと考えられます。

今回はご紹介しきれませんでした。城下町ではほかにも数々の発掘調査が行われており、人々の暮らしの一端を明らかにしています。佐倉市内の他の博物館・資料館でも展示が行われていますので、街並みを楽しみながらぜひ見学してみてください。



佐倉市 弥勒町遺跡出土一分金



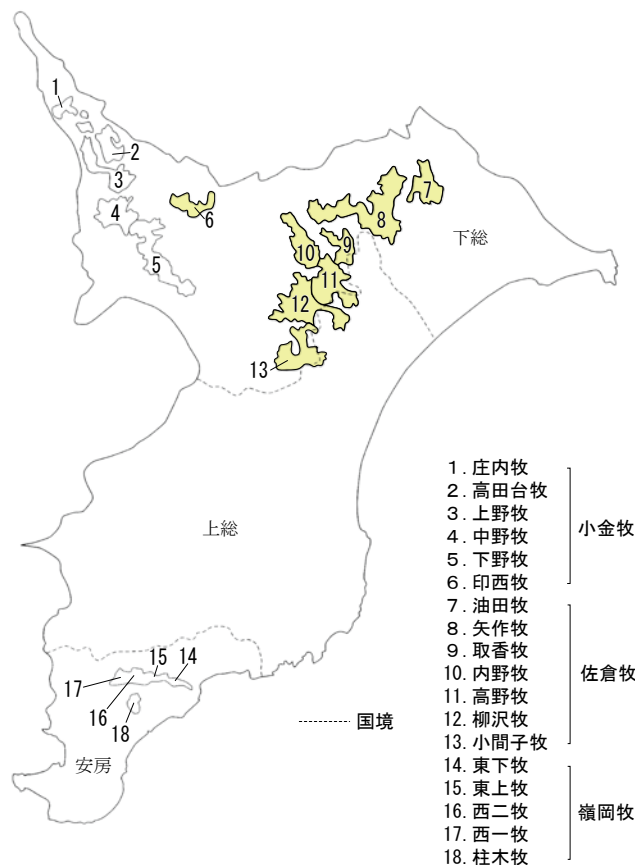
佐倉城絵図(『佐倉市史 巻1』より引用・改変)

牧

近世の房総には、幕府が直接管理する3つの広大な牧がありました。いずれも戦国時代に大名の軍馬を供給していた牧を由来とするもので、現在の印旛にあたる地域には小金牧の一部と佐倉牧という牧が所在していました。全部で7つの牧からなる佐倉牧は、一部を佐倉藩の管轄としながら存続し、明治時代以降になると開墾や陸軍の練兵場の整備などによって姿を消していきました。

牧では、年に1度牧中の野馬を集める野馬捕りという行事が行われました。野馬捕りとは周辺の村落から大量の人手を集めて牧の周囲に配置し、徐々に囲みを狭めながら各牧に1つずつ設けられた捕込^{とっこめ}という施設に野馬を追い込む行事です。追い込んだ馬から幕府に送る良馬と牧に返す若い馬や子を産む馬を選び、新たに生まれた馬に所属を明らかにする焼き印を押しました。残った馬は農民などに払い下げられ、荷運びや農耕の貴重な戦力として扱われました。野馬捕りは牧における一大イベントで、その際の様子が絵図として各地に残されています。

牧に関連する遺構をご紹介します。野馬土手^{のまどて}は、牧の範囲や牧の内部を区画することで、野馬が望まぬ場所に侵入するのを防ぐための施設です。現在でも一部が残存しています。野馬捕りの際に使用された捕込は、四角く囲んだ土手の内を3つに仕切り、馬を追い込んで出られなくする作りになっていました。こちらも八街市などにその姿が残っています。発掘調査によって存在を確認できるのが、シシ穴^{おと}という施設です。近世に作られた深い穴が列状に並んでおり、害獣の駆除や狩りのための陥し穴として各所に作られました。牧においては馬を脅かす野犬や狼などを防ぐ目的があったと考えられます。絵図だけでなく、印旛には現在でも各地に牧に関する遺構が残されています。ぜひ、足を運んでみてください。



牧位置図(『千葉県の歴史 通史編・近世1』より引用・改変)



八街市 小間子牧野馬捕込跡
※八街市教育委員会蔵

展示目録

旧石器時代

番号	資料名称	石材	遺跡名	市町村名	備考
1	ナイフ形石器	硬質頁岩	東海道遺跡	印西市	
2	ナイフ形石器	珪質頁岩	西ノ原第1遺跡	印西市	
3	ナイフ形石器	珪質頁岩	西ノ原第1遺跡	印西市	
4	ナイフ形石器	黒曜石	西ノ原第1遺跡	印西市	
5	槍先形尖頭器	緑色凝灰岩	木戸先遺跡	四街道市	
6	槍先形尖頭器	凝灰岩	木戸先遺跡	四街道市	
7	槍先形尖頭器	凝灰岩	木戸先遺跡	四街道市	
8	細石刃核	頁岩	木戸先遺跡	四街道市	
9	細石刃核	頁岩	木戸先遺跡	四街道市	
10	細石刃	頁岩	木戸先遺跡	四街道市	
11	スクレイパー	黒曜石	西ノ原第1遺跡	印西市	
12	スクレイパー	黒曜石	一之綱Ⅰ遺跡	八街市	
13	石錐	珪質頁岩	平賀惣行遺跡	印西市	
14	石錐	珪質頁岩	西ノ原第1遺跡	印西市	
15	石斧	緑色凝灰岩	瀧水寺裏遺跡	印西市	
16	石斧	緑色凝灰岩	瀧水寺裏遺跡	印西市	
17	接合資料	硬質安山岩	本山Ⅰ遺跡	四街道市	
18	接合資料	硬質砂岩	本山Ⅱ遺跡	四街道市	

縄文時代

番号	資料名称	時期・型式	遺跡名	市町村名	備考
19	深鉢	田戸下層式	椎ノ木遺跡	成田市	期間限定公開(令和7年4月24日まで)
20	鐔付注口土器	加曽利EⅣ式	長田雉子ヶ原遺跡	成田市	期間限定公開(令和7年4月24日まで)
21	鐔付注口土器(蓋)	加曽利EⅣ式	長田雉子ヶ原遺跡	成田市	期間限定公開(令和7年4月24日まで)
22	深鉢	鷺ヶ島台式	間野台貝塚	佐倉市	
23	板状土偶	前期末	間野台貝塚	佐倉市	
24	糸巻形石器		間野台貝塚	佐倉市	
25	有孔鐔付注口土器	加曽利EⅣ式	六崎貴舟遺跡	佐倉市	
26	有孔鐔付注口土器(蓋)	加曽利EⅣ式	六崎貴舟遺跡	佐倉市	
27	異形台付土器	曾谷式～後期安行式	吉見台遺跡	佐倉市	
28	山形土偶	後期	吉見台遺跡	佐倉市	
29	山形土偶	後期	吉見台遺跡	佐倉市	
30	アワビ形土製品	加曽利B式	宮内井戸作遺跡	佐倉市	レプリカ
31	遮光器土偶	晩期	宮内井戸作遺跡	佐倉市	期間限定公開(令和6年12月第2週から)
32	ミミズク土偶	後・晩期	宮内井戸作遺跡	佐倉市	
33	石棒		宮内井戸作遺跡	佐倉市	
34	深鉢	諸磯b式	和良比遺跡	四街道市	
35	独鈷石	後期	飯塚台遺跡	四街道市	西日本型
36	異形注口土器	安行3a式	馬場遺跡	印西市	
37	土偶	後・晩期	馬場遺跡	印西市	
38	耳飾り	後・晩期	馬場遺跡	印西市	
39	石棒	後・晩期	馬場遺跡	印西市	
40	独鈷石	晩期	馬場遺跡	印西市	
41	貝輪未成品	後・晩期	馬場遺跡	印西市	
42	深鉢	十三菩提式～五領ヶ台式	河原子台遺跡	白井市	
43	深鉢	阿玉台Ⅲ式	寺下前遺跡	柏市	
44	土器台	中期	寺下前遺跡	柏市	
45	深鉢	三十稲場式	多古田低地遺跡	匝瑳市	
46	丸木舟	後期	多古田低地遺跡	匝瑳市	
47	櫓	後期	多古田低地遺跡	匝瑳市	
48	木胎漆器(鉢)	後・晩期	多古田低地遺跡	匝瑳市	

弥生時代

番号	資料名称	時期・型式	遺跡名	市町村名	備考
49	壺形土器	中期後葉 宮ノ台式	太田長作遺跡	佐倉市	
50	壺形土器	後期前半 久ヶ原式	上座矢橋遺跡	佐倉市	
51	壺形土器	中期後半 宮ノ台式	臼井屋敷跡Ⅱ	佐倉市	
52	壺形土器	後期前半 久ヶ原式	高岡大山遺跡	佐倉市	
53	甕形土器	後期前葉 大崎台式	宮内井戸作遺跡	佐倉市	
54	壺形土器	中期後半 宮ノ台式	六崎貴舟台遺跡	佐倉市	

番号	資料名称	時期・型式	遺跡名	市町村名	備考
55	甕形土器	後期後半 臼井南式	吉見台B地点	佐倉市	
56	甕形土器	後期後半 臼井南式	吉見台B地点	佐倉市	
57	紡錘車	後期前半 大崎台式	荻原長原遺跡	印西市	
58	紡錘車	後期前半 大崎台式	荻原長原遺跡	印西市	
59	壺形土器	後期前半 大崎台式	荻原長原遺跡	印西市	
60	壺形土器	後期前半 大崎台式	荻原長原遺跡	印西市	
61	甕形土器	後期前半 大崎台式	荻原長原遺跡	印西市	
62	分銅形土製品		郷野遺跡	四街道市	
63	壺形土器	中期後半 宮ノ台式	台方下平Ⅱ遺跡	成田市	
64	壺形土器	後期前半	南羽鳥谷津堀遺跡A地点	成田市	期間限定公開(令和7年4月24日まで)
65	甕形土器	後期前半 大崎台式	南羽鳥谷津堀遺跡A地点	成田市	期間限定公開(令和7年4月24日まで)
66	有角石器		南羽鳥タダメキ第2遺跡	成田市	期間限定公開(令和7年4月24日まで)
67	壺形土器	中期後葉	南羽鳥タダメキ第2遺跡	成田市	
68	壺形土器	中期後葉	南羽鳥タダメキ第2遺跡	成田市	
69	壺形土器	中期後葉	南羽鳥タダメキ第2遺跡	成田市	
70	壺形土器	中期 足洗式	南羽鳥タダメキ第2遺跡	成田市	期間限定公開(令和7年4月24日まで)

古墳時代

番号	資料名称	時期・器種	遺跡名	市町村名	備考
71	鉄製楕円形鏡板付轡	中期 馬具	吉高浅間古墳	印西市	
72	管玉	中期 石製品	前原Ⅰ遺跡	栄町	2点
73	管玉未成品	中期 未成品	前原Ⅰ遺跡	栄町	1点
74	白玉	中期 石製品	前原Ⅰ遺跡	栄町	12点
75	白玉未成品	中期 未成品	前原Ⅰ遺跡	栄町	15点
76	勾玉未成品	中期 未成品	前原Ⅰ遺跡	栄町	1点
77	有孔円盤未成品	中期 未成品	前原Ⅰ遺跡	栄町	18点
78	剣形未成品	中期 未成品	前原Ⅰ遺跡	栄町	14点
79	板状品	中期 石製品	前原Ⅰ遺跡	栄町	9点
80	原石	中期 滑石	前原Ⅰ遺跡	栄町	7点
81	荒割	中期 滑石	前原Ⅰ遺跡	栄町	20点
82	不明品	中期 滑石	前原Ⅰ遺跡	栄町	1点
83	紡錘車	中期 滑石	前原Ⅰ遺跡	栄町	1点
84	ムササビ形埴輪	後期 埴輪	南羽鳥正福寺遺跡	成田市	期間限定公開(令和7年2月～4月24日まで)
85	魚形埴輪	後期 埴輪	南羽鳥正福寺遺跡	成田市	期間限定公開(令和7年2月～4月24日まで)
86	女子人物埴輪	後期 埴輪	南羽鳥正福寺遺跡	成田市	期間限定公開(令和7年2月～4月24日まで)
87	男子人物埴輪	後期 埴輪	南羽鳥正福寺遺跡	成田市	期間限定公開(令和7年2月～4月24日まで)
88	男子人物埴輪	後期 埴輪	南羽鳥正福寺遺跡	成田市	期間限定公開(令和7年2月～4月24日まで)
89	馬形埴輪	後期 埴輪	南羽鳥正福寺遺跡	成田市	期間限定公開(令和7年2月～4月24日まで)
90	鶏形埴輪	後期 埴輪	南羽鳥正福寺遺跡	成田市	期間限定公開(令和7年2月～4月24日まで)
91	水鳥形埴輪	後期 埴輪	南羽鳥正福寺遺跡	成田市	期間限定公開(令和7年2月～4月24日まで)
92	水鳥形埴輪	後期 埴輪	南羽鳥正福寺遺跡	成田市	期間限定公開(令和7年2月～4月24日まで)
93	水鳥形埴輪	後期 埴輪	南羽鳥正福寺遺跡	成田市	期間限定公開(令和7年2月～4月24日まで)
94	水鳥形埴輪	後期 埴輪	南羽鳥正福寺遺跡	成田市	期間限定公開(令和7年2月～4月24日まで)
95	水鳥形埴輪	後期 埴輪	南羽鳥正福寺遺跡	成田市	期間限定公開(令和7年2月～4月24日まで)
96	鷹形埴輪	後期 埴輪	南羽鳥正福寺遺跡	成田市	期間限定公開(令和7年2月～4月24日まで)
97	石枕	中期 石製品	台方宮代遺跡	成田市	期間限定公開(令和7年4月から)
98	石枕	中期 石製品	船形手黒1号墳	成田市	期間限定公開(令和7年4月から)
99	立花	中期 石製品	船形手黒1号墳	成田市	期間限定公開(令和7年4月から)
100	立花	中期 石製品	船形手黒1号墳	成田市	期間限定公開(令和7年4月から)
101	立花	中期 石製品	船形手黒1号墳	成田市	期間限定公開(令和7年4月から)
102	立花	中期 石製品	船形手黒1号墳	成田市	期間限定公開(令和7年4月から)
103	直刀	後期 鉄製品	道作1号墳	印西市	期間限定公開(令和7年1月まで)
104	円筒埴輪	後期 埴輪	道作1号墳	印西市	期間限定公開(令和7年1月まで)
105	鉄刀	後期 鉄製品	麾拝塚1号墳	八街市	期間限定公開(令和7年1月まで)

奈良・平安時代

番号	資料名称	時期・器種	遺跡名	市町村名	備考
106	仏面墨書土器	8c後半 土師器 甕	八木山ノ田遺跡	佐倉市	期間限定公開(令和6年11月から)
107	置きカマド	9c中葉 置きカマド	内田端山越遺跡	佐倉市	
108	銅椀	8c代 青銅製品	高岡大山遺跡	佐倉市	
109	甑	8c初頭 土師器 甑	大袋腰巻遺跡	成田市	
110	二彩碗	陶器	尾上木見津遺跡	酒々井町	期間限定公開(令和7年1月9日まで)
111	陶枕	陶器(奈良三彩)	駒詰遺跡	富里市	
112	文字瓦	平瓦	龍角寺五斗蒔瓦窯跡	栄町	

番号	資料名称	時期・器種	遺跡名	市町村名	備考
113	文字瓦	平瓦	龍角寺五斗蔭瓦窯跡	栄町	
114	短頸壺	8c末	西ノ原第3遺跡(第4地点)	印西市	期間限定公開(令和7年1月10日から)

中世

番号	資料名称	時期・器種・産地	遺跡名	市町村名	備考
115	青磁 碗	13c後葉～14c前葉 貿易陶磁	和良比堀込城跡	四街道市	
116	青磁 稜花皿	15c後葉 貿易陶磁	和良比堀込城跡	四街道市	
117	青磁 稜花皿	貿易陶磁	和良比堀込城跡	四街道市	
118	白磁 皿	15c後葉～16c前葉 貿易陶磁	和良比堀込城跡	四街道市	
119	白磁 皿	15c後葉～16c前葉 貿易陶磁	和良比堀込城跡	四街道市	
120	白磁 皿	15c後葉～16c前葉 貿易陶磁	和良比堀込城跡	四街道市	
121	白磁 皿	15c後葉～16c前葉 貿易陶磁	和良比堀込城跡	四街道市	
122	白磁 皿	貿易陶磁	和良比堀込城跡	四街道市	
123	白磁 皿	貿易陶磁	和良比堀込城跡	四街道市	
124	磁器 染付 皿	15c後葉～16c前葉 貿易陶磁	和良比堀込城跡	四街道市	
125	磁器 染付 皿	15c後葉～16c前葉 貿易陶磁	和良比堀込城跡	四街道市	
126	磁器 染付皿	15c後葉～16c前葉 貿易陶磁	和良比堀込城跡	四街道市	
127	磁器 染付皿	15c後葉～16c前葉 貿易陶磁	和良比堀込城跡	四街道市	
128	磁器 染付皿	15c後葉～16c前葉 貿易陶磁	和良比堀込城跡	四街道市	
129	陶器 天目茶碗	16c前葉～中葉 瀬戸・美濃	和良比堀込城跡	四街道市	
130	陶器 擂鉢	16c前葉～中葉 瀬戸・美濃	和良比堀込城跡	四街道市	
131	土師質土器 擂鉢	在地系	和良比堀込城跡	四街道市	
132	石製品 武蔵型板碑	緑泥片岩	和良比堀込城跡	四街道市	
133	青磁 折縁盤	貿易陶磁	本佐倉城跡	酒々井町	
134	青磁 千鳥香炉	貿易陶磁	本佐倉城跡	酒々井町	
135	青白磁 梅瓶	貿易陶磁	本佐倉城跡	酒々井町	
136	白磁 皿	貿易陶磁	本佐倉城跡	酒々井町	
137	白磁 皿	貿易陶磁	本佐倉城跡	酒々井町	
138	磁器 染付皿	貿易陶磁	本佐倉城跡	酒々井町	
139	磁器 染付皿	貿易陶磁	本佐倉城跡	酒々井町	
140	磁器 染付皿	貿易陶磁	本佐倉城跡	酒々井町	
141	磁器 染付皿	貿易陶磁	本佐倉城跡	酒々井町	
142	磁器 染付盤	貿易陶磁	本佐倉城跡	酒々井町	
143	磁器 染付碗	貿易陶磁	本佐倉城跡	酒々井町	
144	陶器 皿	瀬戸・美濃	本佐倉城跡	酒々井町	
145	陶器 大甕	常滑	本佐倉城跡	酒々井町	
146	土師質土器 カワラケ	在地系	本佐倉北大堀遺跡	酒々井町	
147	土師質土器 カワラケ	在地系	本佐倉北大堀遺跡	酒々井町	
148	土師質土器 カワラケ	在地系	本佐倉北大堀遺跡	酒々井町	
149	瓦質土器 内耳鍋	在地系	長勝寺脇館跡	酒々井町	

近世

番号	資料名称	時期・器種・産地	遺跡名	市町村名	備考
150	磁器 丸碗	肥前系	佐倉城跡	佐倉市	
151	磁器 大皿	肥前系	佐倉城跡	佐倉市	
152	陶器 人形德利	備前系	佐倉城跡	佐倉市	
153	陶器 呉器手碗	肥前系	佐倉城跡	佐倉市	
154	陶器 半球中碗	京・信楽系	佐倉城跡	佐倉市	
155	磁器 細首壺	中国	佐倉城跡	佐倉市	
156	磁器 中鉢	肥前系	佐倉城跡	佐倉市	
157	土師質土器 焼塩壺	関西	佐倉城跡	佐倉市	
158	鯺瓦		佐倉城跡	佐倉市	
159	陶器 灯明受皿	瀬戸・美濃系	弥勒町遺跡	佐倉市	
160	灰釉陶器 猪口		弥勒町遺跡	佐倉市	
161	磁器 德利	肥前系	弥勒町遺跡	佐倉市	
162	磁器 丸形小碗	平戸・波佐見系	弥勒町遺跡	佐倉市	
163	一分金	初鑄年 1714年	弥勒町遺跡	佐倉市	
164	磁器 大皿		弥勒町遺跡	佐倉市	
165	磁器 湯呑碗	瀬戸・美濃系	曲輪ノ内遺跡	佐倉市	
166	磁器 八角鉢	肥前系	曲輪ノ内遺跡	佐倉市	
167	德利 大瓶	瀬戸・美濃系	曲輪ノ内遺跡	佐倉市	
168	磁器 坏	瀬戸・美濃系	曲輪ノ内遺跡	佐倉市	
169	磁器 坏	瀬戸・美濃系	曲輪ノ内遺跡	佐倉市	



(公財) 印旛郡市文化財センター

40th 記念企画展

印旛の珍品展



発掘されたあれやこれ



公益財団法人

印旛郡市文化財センター

千葉県佐倉市春路1-1-4 TEL 043-484-0126 <http://www.inba.or.jp/>